

武蔵野から伝える

戦争体験記録集（第Ⅲ集）

平成27年度

武蔵野市非核都市宣言平和事業実行委員会

武蔵野市

はじめに

今年は終戦から70年という節目を迎えます。

戦争体験者は高齢期を迎え、ますます少なくなり直接お話を聞く機会も少なくなる中、このたび戦争体験記録集第Ⅲ集を発行することができました。

昭和11年生まれの方は、この記録集を読むことで、戦争の記憶が強烈に甦ってきます。

私の住むお寺の近くに中島飛行機関連の3階建てコンクリートビルが建ったこと、武蔵境駅前に日本の飛行機が墜落し、親戚の子どもが大やけどをしたこと、隣の叔父さんが戦死し、お葬式をあげたこと、初めてB29偵察機が頭上を飛んだこと、空襲警報が鳴り急いで学校から帰宅する途中、我が家の方にガラガラドカーンと爆弾が落ち煙が上がったこと、毎日のように爆弾が落ち、たくさんの方が死んだこと、寺の中庭に近所の方が集まり天皇陛下の話聞きながら泣いていたこと、戦後は毎日のように雑炊、すいとん、さつまいも、カボチャばかり食べていつもお腹を空かせていたこと、などが思い起こされます。

身近な方の戦争体験は現実味があり、戦争の悲惨さと無意味さがよく分かり、平和への思いが伝わってきます。

これまで多くの体験者の方との別れと出会いがあります。

したが、今回、シベリア抑留の記録を残してくださいました方が亡くなられました。

今年、記録映画を撮影するため中島の空襲に携わった、P51艦載機の元パイロットとお会いする予定です。空襲時の様子を聞きたいと思っておりますが、今後もできる限り体験記録を残していきたいと思っております。

二度と戦争の悲劇を繰り返さないために、武蔵野から世界平和に貢献できるよう頑張ってください。

武蔵野市非核都市宣言平和事業実行委員会

委員長 中里 崇亮

戦争体験記録集の発行に寄せて

このたび、「武蔵野から伝える戦争体験記録集第三集」を発行いたしました。平成22年と平成24年に続く3回目の発行となりますが、今回、18名の方々から貴重な体験談をお寄せいただきました。寄稿いただいた皆様ありがとうございます。

今年には戦後70年の節目の年を迎えます。

武蔵野市では、戦時中、市内の空襲で犠牲になられた方々に哀悼の意を表するとともに、戦争の記憶を継承し、平和の尊さを次世代につないでいくため、平成23年、初空襲のあった11月24日を「武蔵野市平和の日」に制定しました。

今年の3月には、市がこれまで取り組んできました様々な平和施策や武蔵野の空襲の歴史を多くの方に知っていただき、合わせて日本国憲法や人権の大切さを再認識していただくため、「平和・憲法手帳」を作成しました。また、8月には市内の中高生8名を「青少年平和交流派遣団」として長崎市へ派遣します。次世代を担う青少年に、直接被爆の実相に触れてもらい、全国から集まる青少年と平和交流を図りながら、平和の大切さを学んでももらいたいと願っています。

武蔵野の空襲の歴史や戦争体験をされた方が、年を追

うごとに少なくなっていく中、今後も市民の皆様一人ひとりを大切にしながら、次世代に戦争体験を語り継ぎ、平和の大切さをこの武蔵野の地から発信してまいります。

武蔵野市長 邑上 守正

目次

一 市民の戦争体験

第一部 武蔵野の空襲とその記憶

一 武蔵野での空襲体験

浅田 秀光 1頁

二 戦争体験と子どもたちに伝えたいこと

渡辺 宏貢 2頁

三 戦時中の生活

篠原 多津子 4頁

四 武蔵野での空襲体験

八百板 一秋 6頁

五 私の戦争体験

小峰 光弘 10頁

六 武蔵野での空襲、家族と戦争

田中 國夫 19頁

七 学徒動員の思い出

並木 嘉一 21頁

八 武蔵製作所での空襲体験

矢作 勝美 27頁

第二部 市民の心に残る戦争体験

九 語り伝える太平洋戦争

平戸 孝子 33頁

十 開戦 ～大興安嶺山中の戦い～

猪俣 三郎 38頁

十一 敗戦後の授業忘れられない

島野 信子 45頁

十二 長崎被爆体験について～まさに地獄の海～

藤本 竹次 46頁

十三	戦時中の暮らし	今野 スエ	47 頁
十四	学童集団疎開の思い出	藤田 久榮	48 頁
十五	戦中、戦後の生活	草部 ひさ	52 頁
十六	戦時中の暮らし	稲垣 美智子	56 頁
十七	疎開先での暮らし	榭谷 久美子	59 頁
十八	遥かなり第二の故郷「興南」(北朝鮮)	岡林 暁子	62 頁
二	市民から寄せられた戦争資料等		65 頁
三	年表・工場配置図		72 頁

四 平和に関する条例、宣言

74 頁

◎編集にあたって

- ・ 標記については、当時の呼称に従いました。
- ・ 原稿の編集に際しては、内容や主旨をそこなわないように配慮しながら、読む方に分かりやすいように補足・再編集し、一部注釈をつけました。
- ・ 体験談の内容は、原則、体験者の記述、聞き取りを尊重しています。

一 市民の戦争体験

第一部 武蔵野の空襲とその記憶

一 武蔵野での空襲体験

西東京市

浅田 あさだ

秀光 ひでみつ

昭和17年4月18日、航空母艦から飛び立ったアメリカ軍のB25の編隊16機が、東京、名古屋、神戸などの市街地をはじめ、私が住む京浜地区を爆撃して中国へ帰った。私は、その光景を、深川の小学校の屋上から眺めていた。その2年後の昭和19年11月24日、アメリカ軍はサイパン島からB29戦略爆撃機を発進させ、日本本土への空襲を行った。その最初の目標が、武蔵野市にあった中島飛行機武蔵製作所であった。



サイパンから日本に向けて飛び立つ B29 爆撃機
1944(昭和19)年11月24日

私の父は、昭和16年に兵隊に召集され、台湾に赴任していたが、除隊となり自宅に帰ってきた。その後、中島飛行機武蔵製作所の経理担当として採用された。私が当時通っていた保谷第二小学校の校舎は、平屋の建物で、4つの教室と教員室のみの小さな建物であった。こ

のため、私が5年生の時は、隣の農家の蚕部屋を借りて勉強をしたが、蚕の糞が上から落ちて大変であった。校庭は、隣の農家の土地を借りていたが、こちらは校舎と違いとても広かったので整備をするのに時間がかかった。その後、空襲に備えて学校に防空壕を掘ったが、周辺が竹やぶだったため穴を掘るのに大変苦労した。また、自宅に帰ってから敷地内に防空壕を作るため、毎日のように穴を掘っていた。自宅屋根には、カモフラージュのため、麻を茂らせていた。

11月24日は、午前中で学校が終わり、お昼ごろに自宅に帰った。その時、突然近所に焼夷弾が落ちたため、急いで自宅の防空壕に逃げ込んだが、しばらく恐怖で震えが止まらなかった。いつまでたっても防空壕に家族が来ないので心配したが、隣の家の防空壕に逃げていると分かり、その後合流した。その時、シュッシュードドドーグラグラという音とともに、空気が重く押され、地震のような大きな揺れがおきた。私はもう駄目かと思いい目を唱えていた。その後、空襲解除となり外に出てみると、私が最初に逃げ込んだ自宅の防空壕は壊滅していた。近所に住む金子さん一家が避難していた防空壕に直撃弾が落ち、一家全員が亡くなったという話をあとで聞いた。

二 戦争体験と子どもたちに伝えたいこと

境

わたなべ
渡辺 宏貢
ひろつぐ

私は昭和6年生まれで、武蔵境に生まれ育ち10歳の時に太平洋戦争がはじまりました。

父は、中島飛行機に勤めていましたが、とても厳しく、質実剛健、亭主関白を絵に書いたような人でした。会社に行くときは家族そろって見送り、帰宅時も全員で出迎えました。私は長男だったため、父からは「立派な軍人になるように」と言われ、剣道を習わされていましたが、その道から外れたことをするとよく殴られました。そのせいか、子どものときの夢は立派な軍人になり飛行機乗り（パイロット）になることでした。今でもゼロ戦のプラモデルを自宅に飾っており、飛行機に対するあこがれは持ち続けています。

当時、二つ下の弟と一緒に第二小学校に通っていましたが、校長先生が朝礼の時に教育勅語を読んでいたことを記憶しています。また、教室の入り口には天皇陛下の写真が飾っており、その前で友達とふざけたりしている先生に叱られました。中学校は、父の勧めもあり軍国主義の若人を育てようという教育方針の久我山中学に入

学しました。

中島飛行機への空襲のときは、防空壕から出て見えました。B29の機体がきらきら光っていて、怖いというよりも「あくきれいだな」という印象が残っています。日赤にあった高射砲陣地からの対空攻撃も見ていましたが、B29までは全然届かなかったため、弾の破片が「シュー」という音を立てながら落ちてきました。

3月10日にあった東京大空襲は、東の空が夕焼けのように真っ赤に染まっていたことを覚えています。当時はあのような悲惨なことになっていることは知る由もありませんでした。

ある日、父から家族全員が部屋に呼ばれ、「これからは大変な時代になるぞ」という言葉で戦争が終わったことを知りました。

戦後、社会人になってからは印刷業を始めましたが、当時は毎晩のように飲み歩いていました。そのような荒れた生活を送っていたとき、新聞に掲載されていた劇団員の募集記事をたまたま見て演劇の道に進みましたが、そこでいろいろな先輩方から平和思想を学びました。

私は10〜14歳の一番多感で影響を受けやすい時期に軍国主義の中での教育方針のもと、ある意味生き方が決められていましたが、今の子どもたちは様々な人生の選択

肢や夢がある分、自分の人生は自分で決めていかなければなりません。現在、「さいごのかっぱ」など紙芝居活動を通して平和や友情の大切さを伝えていますが、子どもたちには、「感性」を磨くことと「情操教育」の大切さを伝えていきたいと思います。やはり、人生を楽しむためには、お酒やギャンブルなどの道楽だけではつまらないということ、自分の実体験から伝えていきたいと思っています。

戦後70年を迎え、本当に悲惨な戦争体験をした人が少なくなっていく中、私も含め今の人たちは戦争の本当の怖さを知らないと思います。今の世界情勢や国内の状況を見ると、過去と同じ過ちを繰り返さないか心配なところがあります。戦争の本当の怖さを知らない世代が増え、テレビゲームのような感覚で簡単に戦争を始めてしまわないか心配です。



当時を振り返る渡辺さん

三 戦時中の生活

吉祥寺北町

篠原しのはら

多津子たつこ

私は、現在97歳（大正6年生まれ）で東京小石川に生まれました。

昭和9年頃に吉祥寺に来て、18歳の時に成蹊大学の近くにあった、美濃部達吉氏のお宅でお手伝いとして働くこととなりました。

昭和11年2月、美濃部邸を訪れていた客が突然同氏を襲撃したのです。美濃部さんは逃げる際、犯人から足に銃弾を受け大けがをしましたが、私はその事件があった時にちょうど現場に居合わせたのです。犯人は警官とピストルの撃ち合いをしたのち逮捕されました。美濃部さんは、当時様々な問題を抱えており、脅迫も多かったため、警察官が敷地内を常時警備していました。その5日後にあの「二・二六事件」がおこったのです。

戦争が始まると、八王子の方角に飛行機から焼夷弾が落とされているのが家から見えました。今度は、武蔵野の方にも攻めてくると言われたので、近所の人と竹やりを持って準備をしていました。当時、主人は中島飛行機で工員として働いており、子どもたちは田舎に疎開させ

ていました。

そのうちアメリカの艦載機がやってきて、向かいの家が機銃掃射で屋根を打ち抜かれました。空襲のときは、防空壕が近所にあったように覚えていますが、自分はず、その辺を逃げまわったり、軒下に隠れていた記憶があります。頭のすぐ上に飛行機が来たときは本当に怖い思いをしました。そのあと、飛行機から「日本は降伏しろ」と書かれたビラが投下されました。地元の婦人会で千人針を集め、戦地の兵隊さんに送ったりもしていました。

主人の実家が千葉の富里だったため、食糧をよく吉祥寺まで運んできましたが、ヤミ米やイモ、柿などを運ぶと、こちらであつという間に売れてしまいました。しかし、運ぶ途中で、警察に見つかり没収されたことも何度かありました。食べるものは、当時そんなに困らなかつたと思います。

今の東京女子大あたりには大きな火薬庫がありました。空襲のたびにそこに落ちると思えば怖かったです。

日増しに空襲が激しくなり、武蔵野もそろそろ危ないというところで、大切な荷物を実家の小石川に送ることになりました。ところが、3月10日の東京大空襲で送った

荷物がみんな焼けてしまいました。関東大震災も小石川で経験し家も残りましたが、この時はダメでした。その後、兄に東京の焼野原を見に連れて行ってもらいましたが、いたるところに人や馬の死体がたくさんあり、本当にかわいそうでした。

8月15日は、自宅のラジオから流れる玉音放送を聞いて、戦争の終わりと日本が負けたことを知りました。その前から近所では日本は負けるということが噂されていましたが、そんなことを言うと言と警察に連れて行かれるというので、みんな黙っていました。

戦争は本当に嫌です。二度と経験したくありません。



篠原多津子さん



篠原さんのご主人が、中島飛行機武蔵製作所へ通勤するときに使用していたカバン

四 武蔵野での空襲体験

相模原市

やおいた
八百板

かずあき
一秋

中島飛行機武蔵製作所への就職

私は昭和3年に目黒で生まれた。5人兄弟の長男で、弟が3人、妹が1人おり、戦時中、弟妹は山梨へ疎開していた。私は田町の東京高等工学校付属工科学校機械工学科（現芝浦工業大学）まで通っており、付属3年、予科1年、高工3年という学年割りだった。私は、戦争中今の中学生の年齢だった。校長先生は、陸軍大将で東京市最後の市長だった岸本綾夫であった。勉強は半分が工学で半分が軍事教練となった。機械についてはプロの先生が教えてくれたが、地理、歴史などの教科や訓練の先生は将校だった。戦争が悪化してきた昭和19年3月に、私は付属学校を卒業することになり、その上の高工へ進学する予定だった。しかし、12月に生徒全員が講堂に集められ、勲章をぶらさげた校長が訓辞で「今はこういう時代で、学徒で動員されるから、かえって会社にいた方がいいぞ。上級の学校へ行かないでどこかへ勤めろ。」と言った。そこで就職場所を考えているときに、学校に貼ってあった求人ポスターの中に、中島飛行機を見つ

けた。私の父が自動車エンジンの整備をしてこともあり、私はこれから飛行機のエンジンの大事になると思い、学校から推薦状をもらって、16歳になる昭和19年4月1日から同工場に勤めることになった。通勤は、目蒲線で西山から目黒までいき、途中で中央線に乗り換え、三鷹まで行っていた。自宅から職場まで約2時間かかった。

工場での仕事

巨大な工場内では、地下道を通って移動した。私は工業学校を卒業したため、訓練も受けずいきなり歯車を作成する部署へ配属となった。ここでは、エンジンのパワーをプロペラに送る部分の部品を作っていた。周りの機械はすべてアメリカ製だったので、アメリカが作った機械で部品を作り、戦争をしていたことになる。他の工場では通常、一台のモーターにベルトをかけて何台もの機械を動かすが、中島飛行機の場合は、機械一台一台にモーターがついていたが、工場はわりと静かだった。仕事は大変厳格で、100分の1の誤差も許されなかった。職場には、勤労働員の人もおり、2交代で朝8時から夜8時までの12時間勤務を行っていた。勤務日は、土日はなく、海軍方式の月・月・火・水・木・金・金の勤務だった。

昭和19年の夏頃、軍から英語の使用が禁止されたため、

普段英語名で呼んでいたエンジン（↓発動機）やガソリン（↓揮発油）、オイル（↓油）などを日本語で言うようになった。しかし、日本語に訳せないものもあり、現場では結構困っていた。

工場には大食堂があり、入口には当時の陸軍大将である山下奉文の肖像画が掛けられていた。良いものは食べられなかったが、三食とも量は食べる事ができた。

私は入社にあたって、会社に対して夜間学校に行かせてほしいと条件を出していたが、「会社の中に学校制度がある。早く幹部になれるし勉強もできるから、それを受けなさい。」と言われた。そのため、社内の試験を受けて、秋からは工作法特別研究生（工研生）として第一青年学校に通い、東伏見の寮に入る事になった。当時、工場の中は憲兵や将校が頻繁に歩いて監視していたが、工研生は非常線パスを持っていて、工場内のどこへでも行くことができた。試運転工場へも行き、作られたエンジン運び出していくところも見たことがある。夜、トラック1台にエンジン2台を載せて運んでおり、工場の北門から青梅街道の方へ搬出していった。

当時ガソリンの一滴は血の一滴とよく言われていたが、エンジン用のオイルが不足していたため、松根油（しよんこんゆ）をオイルの代わりに使っていた。この油は、

松ヤニから採取して使うが、そのままでは使えないので、浅草の隅田川近くにあった製油所まで精製した松根油を取りに行った。

現在、武蔵野市役所のある場所は、当時資材置き場で、シリンダがいっぱい置いてあったことを覚えている。

私は、本部から指示があった際には、伝令書や運ぶといった仕事をしており、伏見に爆弾が落ちたときには、伝令役になった。何かあると軍が通路を通行止めにしてしまったが、当時、私は非常線パスを持っていたので、憲兵にそのパスを見せると通ることができた。

空襲の様子

空襲のときは、青年学校の裏の松林で待機していた。現在の東伏見に陸軍の駐屯場所があり、ここに電波探知機があった。「南の海上に国籍不明機あり。現在北上中。」等大きな声で言っているのが探知機から聞こえ、仲間と「そろそろ警戒警報が出るんじゃないか。」と話している、5分か10分くらいで警報が発令されるといふ状況だった。そのため私たちは、空襲が始まる前に情報を手にすることができ、それを会社へ伝えていた。

昭和19年5月に指を負傷したとき、西工場の地下通路を通過して中島付属病院へ行った。この病院は工員以外にも

使うことができ、空襲を避けるために、外の壁に赤十字のマークが描かれていたが、病院が空襲の被害を受けた後は、武蔵境の日赤病院に行くように言われた。

11月24日の初空襲のときは、私は夜勤だったため寮で寝ていた。夕方になって目が覚めて、なんだか騒々しいなど思っ外を見てみると、工場が空襲を受けた後だった。寮の近くに落ちた爆弾は、崖の下に落ちたため、爆風は来なかったようである。

自分が働いているときに爆撃を受けたことはないが、B 29と日本の飛行機の空中戦を間近で見たことがある。日本の戦闘機がB 29の後方から機体の下をくぐり、主翼の付け根に体当たりした。真つ二つになった日本の戦闘機からパイロットが出てきたが、パラシュートが開かず、のぎり屋根のシリンダー工場に落ちてきた光景を覚えている。夜、工場を見に行ったが、現場の人に聞くと、屋根の鉄骨は曲がっており、落ちたパイロットは亡くなったと聞いた。このパイロットは日本のために死を覚悟で敵機に突っ込んでいったのだと思う。

会社の命令で久我山に墜落したB 29の調査に歩いて行った。この飛行機はサイパンから飛んできたもので、機体についているエンジンについては仕事柄よく分かるが、補助タンクの材質が分からなかった。当時は見たことも

聞いたこともない不思議な材質だと思ったが、戦後、プラスチックかビニールで作ったものと分かった。

工場の中には「神風」という飛行機のエンジンの予備が置いてあった。不発の1トン爆弾が工場内に転がっていたときに、そのエンジンの周りは何の被害もなかった。その時、偉い人が「ああ、やっぱり神様がいたのかなあ。おい、八百板、あれがロンドンまで飛んだ飛行機のエンジンの予備だぞ。」と言っていた。

不発弾はいくらでもあり、兵隊がグラウンドへ持って行き、夜中に爆発させていた。一方で時限爆弾もあり、こちらは不発かと思うと突然爆発したりして怖かった。

当時練馬に飛行場があり、ときどき艦載機グラマンがそこを狙って攻撃していた。私が外に出ているときにグラマンがやってきたことがあり、学校へ入る直前に、飛行機がいきなりエンジンを吹かしグアーッと襲ってきた。私が急いで伏せると、指先のすぐ先のところを機関砲でピュッピュッと撃ってきた。学校から見ていた仲間はいいつはやられた、と思ったようだが、私が起き上がり無事だったのがわかり、安心したそう。

飛行機から爆弾が落ちる様子もよく見ていた。飛行機の胴体が開き、黒いごまみたいな爆弾が出てくる。爆弾には羽が4枚ついているが、それが回転し始めるときの

音は、ヒュルヒュルと聞こえる。その後一定の速度になって地上に近づいてくると、ガラガラという音に変わる。それが地上につくとドカンとなる。ヒュルヒュルはまだ怖くなく、ガラガラが怖い。飛行機の爆弾は慣性で進むので、落ちるところはだいたい見当がつき、松林から見ている分にはそれほど怖くなかった。東京大空襲はもちろん、横浜の空襲すらも工場から見え、非常にびつくりした。空が真っ赤になって見えた。

終戦

昭和20年8月15日、寮で待機していたときに玉音放送を聞いた。その1週間前に西武線に乗っていたときに、見知らぬ男性から「おい若いの、1週間後には日本は負けるぞ、覚悟しとけ。」と言われた。その後1週間で玉音放送があり、あの人はどういう立場の人だったのだろうかと不思議に思った。翌日の8月16日から10月までは、残務整理で工場の本部におり、爆弾の落ちた後にさつま芋を植えて育てた。戦後は食料が不足していたので、残務整理をしていた社員に配ると大変喜ばれた。

10月に退職金をもらって退職した。中島飛行機には1年半しか勤務していなかったので、退職金なんて考えてもいなかったのでもうれしかった。中島に勤めてい

た時の給料だが、当時は月に2回給料が出ており、1回あたり1円50銭ほどと記憶している。1ヶ月にすると3円ほどをいただいていた。当時はお金には不自由しなかったが、物が不足していたので買うものがなかった。

若い人へ

私は現在87歳だが、中島飛行機で経験した1年半のことをいつまでも忘れることができない。

月日が流れ、艦載機や空中戦について知らない人がいることに驚いている。今の政治は、人のことは聞かない、自分の言っていることが正しいというふうに聞こえ、戦前とそっくりだと感じる。

若い人にはあの体験はしてほしくない、二度と戦争はしてはいけない：

このことを若い人たちに伝えたい。

五 私の戦争体験

吉祥寺東町

小峰 こみね

光弘 みつひろ

私は昭和12年生まれで、5人兄弟の末っ子です。戦争が始まると、長男は陸軍に入りニューギニアへ行き、二男は海軍機関学校へ、長女は中島飛行機に勤務し、次女は藤村女学校の学生でした。中島飛行機武蔵製作所への空襲があつたとき私は小学校2年生でした。

家の前には、のどかな田園風景が広がっており、女子大通り沿いは、ほうき草畑でその奥に麦畑がありました。現在の三中の場所は畑でした。

当時、女子大通りから五日市街道まで通り抜けのできる道があり、三中の校庭のちようど真ん中あたりを通っていました。その道沿いに、根元が2本に分かれた10mを超す大きなミズキの木があり、その根元を取り囲むようにお茶の木が植えられていて、祠（ほこら）などもありました。三中が完成してから、数年後にこの木は伐採されましたが、同校の校章が「ミズキ」なのはこの木があつたからでしょう。当時この木は地域のシンボルツリー的な存在でした。

女子大通り沿いには、30本ほどの銀杏の木があり、道

路の半分近くまで枝が生い茂っていたため、日陰ができてリヤカーで荷物を運ぶ人たちの休み場所になっていました。

銀杏林の中ほどに防空壕がありました。原爆投下の翌日、この防空壕の穴がまっすぐに掘られていたため、これでは放射能をよけられないということで、近所の人々が20〜30人集まって、コの字型に掘りなおす作業を行い、まわりの木も何本か切つて一晩で完成させました。

一番上の姉が勤めていた中島飛行機武蔵製作所は、巨大な会社で従業員がたくさんいると姉から聞いていました。また、あちこちに社員寮があり、近所には木造2階建ての「相愛寮」という大きな社員寮ができました。そこには何十所帯も入っていましたが、その寮から朝自転車で通う人たちを「銀輪部隊」とよんでいました。また、この寮のトイレは当時では珍しい水洗便所でした。

当時中学生だった下の姉は、おしゃれをしたい時期でしたが、「一億総決起」と書かれた鉢巻をして通学していました。学校へ行くとき校庭に軍のトラックが待ち構えていて、組ごとに割り振られた車両に乗り学徒動員として各職場に連れていかれました。姉が行っていた場所は、現在の味の素スタジアム（調布市）にあつた海軍の燃料工場でした。詳しい仕事の内容は聞きませんが、

いろいろな作業をさせられ、仕事中は兵隊さんの見張りがあっておしゃべりはできなかつたようです。夕方トラックに乗せられ学校に戻り、点呼をとってから自宅に帰ってきました。

武蔵野の空襲

武蔵製作所が空襲を受けた時、長いサイレンの警戒警報が鳴り、その後は断続的な空襲警報に変わりました。私は、怖さと敵の飛行機を見たい気持ちが半分半分で、初めての空襲のときは、防空壕に入らず空を見上げていました。この時は、高度1万メートルほどを銀色の点に見える何十機もの飛行機が飛んでいる姿を見ても不思議と怖さは感じませんでした。B29爆撃機は敵機ではありませんが、その長い胴体と翼は子ども心にとっても恰好よく見えました。

防空壕に逃げる時は、手製の防空頭巾をかぶり、母は上下モンペ姿でズック（靴）を履き、水筒と非常食の入ったカバンを肩に下げていました。

最初の空襲は、お昼頃から始まりましたが、東町あたりにもかなりの爆音が響き、黒煙も見えました。家の前を負傷した人に乗せたりヤカーが通り過ぎ、上にかげられた筈（むしろ）からは、出血したままの足や手が出て

おり、手当もされなのまま運ばれる瀕死の重傷者もいました。工場近くの中島病院が患者でいっぱいになり収容しきれなくなつたため、荻窪工場近くの病院に運ぶようでした。父がリヤカーを引いていた人に工場の様子を尋ねると、「いま地獄ですよ。」と言っていました。

姉は、その日なかなか帰ってきませんでした。夜の9時頃、玄関の外で夢遊病者のように立っている姉がいました。頭は爆風で飛んだガラス片や木くずがからみ、まるでスズメの巣のようでした。来ていた服も泥や血にまみれていましたが、ケガはしていませんでした。姉は幸運にも、空襲の前日に違う課に異動となつたため助かつたようでした。五体満足の社員は、負傷者の収容に当たられ、全身血まみれの人や片腕が吹き飛ばされた人たちが担架に乗せて運んでいたそうです。会社からは2週間の休暇が出たようですが、姉はそれ以来、空襲警報が鳴ると体を震わしながら泣いていました。精神的ショックがかなり大きかつたようです。幸いにも自宅のあった東町周辺は空襲に遭いませんでした。

女子大通りは幹線道路のため、空襲以前は、毎日荷馬車に2メートル四方の大きな木箱を積み、10台ほどの列を組んで、武蔵製作所で作ったエンジンを荻窪工場に運んでいました。馬一頭に人が一人ついて朝8時頃通り過

ぎていきました。荷馬車1台に1つの荷物を積んで運んでいるのを見て、子どもながらにこんな生産量でずいぶんのんびりしているなと思ったものですが、実際、日本の生産量はその程度だったのです。

中島への空襲も日増しにひどくなり、銀の点だった飛行機もだんだん低空で攻撃するようになってきました。

当時、現在の伏見通り沿いや成蹊大学などに高射砲の陣地があり、敵機めがけて攻撃していました。

戦争も徐々に激しさを増し、市内でも戦闘機同士の空中戦が見られるようになりました。追いかけてたり追いかけられたりというのは、見ていてあまり気持ちのいいものではありませんでしたが、ドッグファイトと言われるように、犬が犬を追いかけているように見えました。我が家のちょうど上空で、隼とグラマンが戦闘を繰り広げていて、隼がグラマンに追いかけていました。その時、グラマンから撃たれた機関銃の流れ弾がうちの1軒先の家のトタン屋根に当たりました。その後、空襲警報が解除され、お巡りさんと軍人さんがトタン屋根を調べたところ、弾は、屋根のトタンを突き抜け、その下の野地板と30センチくらいの松のハリ、天井板を貫通し、さらに畳、床下を抜け縁の下の土20センチのところまで達していました。お巡りさんが掘り出したところ、25ミリ

砲だと言っていました。その弾がまともに人間に当たっていたかと思うととても恐ろしかったです。

戦争中、もっと怖かったのが高射砲陣地から撃たれた弾の破片が落ちてくることです。高射砲の弾は四方八方に飛び散り、敵機に当たらなかったものは、当然地上に落下してきます。この弾は特殊な金属でできており、破裂すると10センチ四方のカミソリの刃のようなものが飛び散ります。この破片が家の屋根を突き抜け、人にも当たればイチコロだと思いました。

夜間空襲のときは、照明弾が落とされましたが、この照明弾は、事前に攻撃対象を確認するために落とされるものです。この照明弾につけられた落下傘が、巨大なコウモリ傘のように開き落ちてきました。この照明弾の先には、写真のストロボに使われるマグネシウムがついていて、それが燃えるともものすごく明るく光り、まるで工場周辺の上空が昼間のように明るくなっていました。

当時、灯火管制といって、各家庭での明りの使用が極端に制限されていました。白熱電球に傘を付け、その周りを黒い厚手の布で覆うと真下しか明るくなりません。その中で食事をしたり本を読んだりしていました。しかし、こんなことをしてもあんなに明るい照明弾を落とされてはあまり意味がないと思いました。

アメリカ軍は、空襲前に必ず3機で偵察に来ていました。真ん中の飛行機は写真を撮影し、残りの2機は護衛です。そのあと空襲を行い、またしばらくしてから戦果を確認するためやってきました。その結果を受けて、また次回の空襲の作戦を立てるのです。アメリカ軍は、中島飛行機の息の根を止めれば、日本の航空機の生産が半減することは分かっていたので、執拗な空襲を繰り返していたのでしよう。

各地の空襲

立川空襲は、午前中から始まったが、この日は曇天で爆撃の音しか聞こえず、2時間くらい響いていたと思います。

八王子の空襲は夜間爆撃で、西の夜空がピンク色に染まっていたのを覚えています。八王子は広範囲に爆弾が落とされたようですが、私のいとこが当時八王子に住んでおり、兄妹で逃げまどったことを戦後聞きました。この時は焼夷弾も落とされたようです。

横浜大空襲は朝から始まり、真南の方角に空襲の様子が見えました。建物までは見えませんが、街中火の海になったのが、空襲が始まって1時間ほどたってからだそうです。煙と熱気が風にあおられ上昇気流が生まれたた

め、大きな入道雲が見えました。その時、艦載機や雷撃機が太陽光線に照らされ、きらりとした点で見えました。海上の航空母艦から飛び立ち、横浜の上空で急降下しながら爆弾を投下したようです。まわりには高い建物がなかったため空襲の様子がよく見えました。

3月10日の東京大空襲は、9日の夜8時頃に始まり、かすかに音が聞こえた程度でしたが、夜中の12時過ぎには東の空全体がピンク色に染まっていました。私の近所の旧法政跡地（現在はマンション）は当時、通信省の敷地で、そこには立派な桜の木が十数本ありましたが、その木がシルエットで見えるほど東の空が明るく見えました。恐ろしいことが起こっていると思っていました。そのシルエットはまるで日本画を見ているようでした。明け方近くになってそのピンク色は消えず、そのうち焦げ臭いにおいと灰が飛んできました。学校に行くと、東京中が燃えちゃったらしいよという話が出ていました。

麦畑になれなかつた屋根

中島飛行機の工場の屋根を塗り変えた話は、塗装業をしていた父から聞きました。父は昭和6年からペンキ屋をしており、戦争が始まると徴用工として軍事工場へ借り出されました。その後、工場の屋根の色を迷彩色に塗

りなおすため、千人の塗装工を募集したそうですが、20
〜40代の働き盛りはほとんどが戦地に行っていたため、
実際集まったのは300人ほどだったそうです。

屋根の色を塗り変えた様子が描かれた絵本「麦畑にな
れなかった屋根たち」では、塗り直し作業は1ヶ月あま
りで終わったかのように書かれています。実際の作業
は大変だったようです。迷彩色は黄色、緑、黒の塗料が
必要ですが、広大な面積の屋根を塗るためには相当量の
ペンキが必要です。当時塗料は配給制だったため、塗料
自体が有り余っていたとも思えません。限られた人数と
ペンキの量で、短期間のうちにあの広い工場の屋根を仕
上げるには大変苦労したと思います。また、使用する刷
毛は通常30センチ幅のものを使うそうですが、その時は
3寸（10センチ）幅の刷毛しかなかったそうです。

当時の武蔵野町には、ペンキ屋はうちを含め3軒しか
ありませんでした。中島での着工式の時、その3軒のう
ち誰かがあいさつをすることとなり、私の父がやること
になったそうです。父は、会社の重役や軍人などがある
中、都内各所から来ているペンキ屋の前に「中島は、日
本にとってなくてはならない工場なので、この工場を守
るために」という内容の訓示を行ったそうです。

実際の作業は班ごとに分かれて行いましたが、父は作

業員に向かって、「さつきはあんな挨拶をしたが、もし
警報が鳴ったら敵は真っ先にここを狙ってくる。仕事を
放つてでも逃げるように。命を無駄にするな。」と伝え
たそうで、グループごとに何処へ逃げればよいか、事前
に確認していたそうです。

仕事が5時で終わると、大きいコップにお酒をなみな
みとつぎながら、各作業員に「ご苦労様」と労いの声を
かけて回っていました。当時、お酒も配給制で家族ひ
と月4合瓶という時代です。職人はお酒が好きな人が多
いため、注いでもらってもすぐ飲んでしまい、また後ろ
に並んで注いでもらう人もいたそうです。

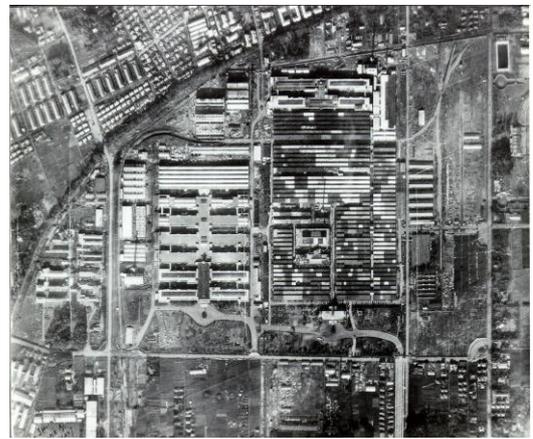
幸い工事をしているときは空襲がなく、犠牲者がでな
くてよかったですと父は話していました。

毎日コールトールだらけになりながら行う屋根塗りの
作業は本当に大変だったようです。寒くなるとコールト
ールは粘度が高くなるので、屋根の塗り変えは夏場と決
まっていたそうです。しかし、そんなことも言えないの
で、作業能率を少しでも上げるため、工場の従業員に掛
け合い苛性ソーダを仕入れ、それを大量の水で溶かした
ものをコールトールに入れ粘度を薄くして塗っていました。
苛性ソーダを入れ攪拌すると粘度が薄くなるよう
ですが、父もこんなものは持ちが悪く効き目が無いよう

鉄板の屋根にもよくないのは分かっていたそうです。しかし、作業効率を上げるためには仕方なかったそうで、ペンキを塗るといよりは、流した水を刷毛でこするような作業だったようです。父は、「こんな作業はペンキ職人のする仕事ではないな」とボソツと言っていました。とにかく広い屋根を短期間で仕上げるためには、良い仕事かどうか二の次だったようです。

実際は、黒く塗った屋根はかえって敵に見つかりやすいし、事前に撮られた偵察写真を見れば、何の効果もなかったのではないかと思います。

父が工場の屋根を塗っていた時、工場の周りで一生懸命に穴を掘っている人たちがいたそうです。聞いてみると、松根油を入れる穴を掘っていたそうです。松根油の採取跡が井の頭自然文化園にある松に残されていますが、松の表面に傷（溝）をつけて松脂とともに、べたべたしたもの（松ヤニ）を採って精製します。初めはそれを飛行機の燃料代わりにしようと考えましたが、実際は燃料効率が悪く馬力もないためやめたそうです。その後の使い道ですが、空襲警報が鳴ると掘った穴に松根油を流し込んで火を付けたそうです。理由は、燃やすと黒い煙がたくさん出るため、煙幕を張って敵機から工場を隠そうとしたようですが、事前の偵察写真もあり効果はどの程



空襲前に撮影された米軍の偵察写真
(1944年11月)

度であったか分かりません。

中島飛行機の工場は、関東地方の各地にありました。武蔵製作所が空襲を受けたため、そこで働いていた姉は宇都宮工場に転勤となりました。しかし、転勤後1週間ほどで宇都宮工場も爆撃に遭い、そこでの仕事もできなくなりしました。その後、家に戻ってきた姉は、「私は死神を呼ぶ女になった。悪いことをしていないのに、何で行く先々で爆撃されるのか。」と涙ぐんでいました。

終戦間近のころ、小学校で竹やりの訓練があり、先をとがらせた竹を自分で作り学校に持っていきました。当時、働き盛りの男性はみんな兵隊にとられていたので、

50〜60代の地元の消防団や警防団の方、軍人さんが来て「槍持て！進め！突け！」などと大声を出しながら指導していました。中には、竹やりで寄りかかりやつと立っているようなおじいさんもいて、子どもながらに見ている哀れになってきました。私はこんなことをして敵を倒せるのかと疑問に思い、友だちに話しましたが、「そんなことを言う」と先生に叱られるから黙っていた方がいいよ」と言われました。

戦争末期には、兵器の原材料となる鉄や金属類が不足していたため、家庭にある金属類をすべて供出するよう軍から命令を受けました。町役場の人が各家庭をリヤカーで回っていて、中には、高価な貴金属を供出している家庭もありました。集められたこれらのものは、一旦学校に運ばれましたが、校庭の一角は金属類がう高く積みまれの山のようになっていました。その後、終戦を迎えましたが、しばらくこの「山」は片付けられず校庭を占拠していたため、好きな草野球ができず困っていました。しかも、雨が降ると金属類からサビ汁が出て校庭が真っ茶色に染まり、異様な臭いもしていました。半年くらいたつてから役場の人がやつと片づけに来てくれました。

善福寺の話

終戦直後の8月20日頃、ちょうど夏休み中でした。当時、善福寺池は子どもたちの遊び場で、そこでトンボ取りや雷魚釣りに夢中になっていました。

昼過ぎに幌付きの軍のトラックが3台やってきて、兵隊さんが車から降りてきました。子ども心に何か始まるのではないかと思い、高く茂ったヨシの木陰に隠れてみていました。トラックから、軍用の折たたみボートを出し始めたので、釣りでもするのかと思いついて、ボートに木の箱や機関銃、小銃を積み始めました。満載に積んだボートを池の真ん中まで漕ぎ出し、そこで次々と投げ捨てていました。また岸まで戻ってトラックから荷物をボートに積み込み池に捨てる作業を繰り返していました。「あれ、鉄砲じゃないか？」、「木の箱は弾か？」と言っているうちに、あつという間にトラックに積みかかっていた荷物をすべて池に捨て、去って行きました。家に帰っても家族に話すのはやめようと言いつつ、子ども心に見てはいけないうつろいながら見てしまった感じでした。おそらく、米軍に占領される前に武器を始末しようとしていたのでしょう。この人たちは陸軍の制服を着ていたのを未だに覚えています。どこの部隊かまでは分かりませんが、池底を掘り返すとこれらのものが出てくると思います。70年前のことなので今頃はへ

ドロに埋もれていると思います。

機銃掃射

終戦間際になると、頻繁に警戒警報が鳴るようになりました。6月の麦の穂が黄色くなり始めた頃です。当時の登下校は上級生が下級生を引率していましたが、私達のグループは5年生を先頭に、5〜6人で帰っていました。第三中学校の校庭の真ん中あたりまで来たとき、東の方から超低空で戦闘機が1機飛んできました。

逆光で戦闘機がシルエットで映りましたが、飛燕という、水冷エンジンのすごくカッコいい戦闘機です。今でも外車のフォードやダッチを見るとカッコいいと思いますが、当時、飛燕は私たちのあこがれで、「飛燕だ！」とみんなで叫んでいました。かなりの低空で上空を通過していききましたが、リーダーの5年生が「今の翼の印を見たか？日の丸じゃなかったぞ、白い星だ！」「白い星はアメリカ空軍のマークだから、じゃあ、P51か？」「そうだ、あれはP51ムスタングだ」私たちは敵機のことよく知っていました。

まわりを見渡すと、私たちは麦畑の真ん中にある道に子どもだけ6人で固まっていました。「あの飛行機は俺達を狙って撃ってくるんじゃないか？」「そんなことな

いよ、もう行っちゃったよ。」「絶対反転してくるぞ」
「ほら向かってきた！」　まとまって逃げると目標になりやすいので5年生の指示で、「お前たちはあっちの畑に潜り込め」
「お前たちはあっち！」と言われました。
しかし、私はすぐ向こうに自分の家が見えたので「うちに帰りたい」と言い、反転して高度を下げながらやってくる敵機に向かって駆けだしました。その瞬間、私を狙って撃ってきたのです。あの高度で本気で狙っていたら、おそらく簡単に撃たれていたはずですが、銃弾は私の2mばかり離れたところに着弾していました。

機銃掃射の音はいまだに耳に残っていますが、独特な音がします。固い土の畑道なので当たると1mぐらいの砂埃が上がりました。私は恐怖のあまり、おしっこはちびるし、声は出ない、地べたにへばりついていました。一緒にいた仲間たちは、その時、私がやられてしまったと思っただけです。飛行機が去って行った後、「みっちゃん生きてる？」と言ってきました。弾は当たってはいませんが、しばらくは声も出せず、立ち上がることもできませんでした。未だにあの時の怖さは忘れられません。その時の場所が、今の第三中学校の校庭の真ん中あたりなので、掘ったら弾が出てくると思います。でも、P51は本当にかっこよかったです。

B29 の墜落

日付は不明ですが、うちの真上で B29 が被弾したこともありました。木更津方面から B29 が飛んで来て、立川や中島飛行機を爆撃後、ちようどうちの上あたりで編隊を組み直し帰って行くところでした。渡り鳥は逆 V 字の隊形を組み飛びますが、飛行編隊も同じであの飛び方が一番効率的らしく余分な燃料がかからないそうです。

ある日、一番後ろから編隊に入ろうとした飛行機の右のエンジンから火が見え、そのうち黒い煙が出てきました。かなり低空飛行だったので、成蹊大学にあった高射砲が命中したと思いますが、そのうち、左の翼が全部火に包まれました。ぐらりと右に傾き、全体が火に覆われたと思ったら、まっすぐ落ちてきました。ちようど久我山あたりに落ちたので、自転車で見に行きました。

憲兵が縄を張って入れませんでした。機体がバラバラになってジェラルミンのかけらがいっぱい落ちていました。私は縄をくぐって JP-55 など文字の入っているのをこっそり持ち帰りました。

驚いたのは、垂直尾翼がとても大きく、飛んでいるときもかっこいいと思いましたが、無傷で立っている垂直尾翼は周りの木よりも高く目立つほどでした。機体はあちこち損傷していましたが垂直尾翼はしっかりしていま

した。

墜落場所は井の頭通りと久我山の駅の間あたりでしたが、運悪く高校の友達の家の上で墜落したそうで、母親と姉が亡くなったそうです。

墜落した B29 には乗組員が 8 人乗っていたようで、18 代半ばの青年 3 人程が大火傷を負いながら手を挙げて中から出てきたそうです。しかし、敵兵憎しで周りの人が竹やりで突き殺してしまっただけです。全身やけどで恐らく長く生きられないのに、何で殺す必要があるのか。その後、遺体は簡単に埋葬したそうです。

ところが戦後何年かたって、この話が全く逆の話としてペンタゴンに伝わったそうです。亡くなった米兵を住民が丁寧に葬ったという話で伝わったらしく、敵国民ながら、お礼に行くという話になり、それでは大変ということで、墜落現場を全部掘り返して新しい石塔を立てねんごろに葬ったそうです。

九州の方では、敵兵を丁寧に葬った町があったと聞きます。死んでしまったら敵も味方もないのかもしれないが、自分の国をめっちゃにしたのだから、半死半生でも成敗したい気持ちも分らないはあります。

六 武蔵野での空襲、家族と戦争

境

田中 たなか
國夫 くにお

武蔵野での空襲

昭和19年以降、B 29の爆撃は日増しに激しくなり、昼夜にわたり攻撃が続くようになりました。夜には照明弾が投下され、上空が真昼のように明るくなることもあり、皆外へ出て見物するようになりました。

ある日の午後、空襲警報が鳴り、やがてB 29が大編隊で襲来しました。これを地上から迎え撃つため、すぐ近く（現在の日赤病院周辺）にあった高射砲陣地から反撃しました。また、空中では調布の基地から飛び立った飛燕が応戦し、華々しい空中戦を展開していました。一瞬閃光が走り、B 29撃墜かと思った瞬間、火を噴いて落ちてゆくのは飛燕で、B 29は糸乱れず編隊を組んだまま堂々と飛行し、中島飛行機武蔵製作所へ1t爆弾を投下していきました。このときの音は凄く、金属性の音がキーンとうなってその後、地面が激しく揺れました。

日増しに空襲が多くなる中、いつでも防空壕へ逃げ込

めるよう寝間着にも着替えずに寝ていました。灯火管制もあり、本当にゆっくり寝ることもできませんでした。

戦後、工場にあった機械を移送する作業に行きました。鉄筋4階の工場の屋上から地下まで爆弾が通った穴があいていました。鉄筋にコンクリートががちり絡みついたまま宙にぶら下がったものもあり、爆撃の凄さを感じました。

戦時中は、特に夏休みというのはありませんでした。終戦の日はまだ暑く、それでも校庭に全員集合させられ、雑音の多い玉音放送を聞きました。当初は何のことだからよく理解できませんでした。

その日あたりから体調を崩しはじめ、しばらく下痢の連続で体もやせ細ってきました。医者診断は大腸カタルとのことだったので、特段の薬もなく、挙句の果てに医者から見放され、親戚も集まってきました。病名は赤痢だったようで、寝ているあいだはほとんど食えることができず、その間、学校も休み、20日間ほど寝たきりでした。どうにか起きられるようになったのは、その10日後でしたが、ほとんど奇蹟でした。

兄の戦死

家では、長兄が復員するのではと毎日放送されるラジ

才を聞いていましたが、兄の名前を聞くことはできませんでした。また、皇居周辺の帰還促進デモにも母と一緒に何回か参加しましたが、徒労に終わりました。

長兄は昭和19年12月10日に近衛3聯隊に入隊しており、私は父と一緒にその部隊まで兄の荷物を引き取りに行きました。兄は、1週間ほどで下関から斧山に渡り北支へと進んだようです。その間、父母の写真を送るよう依頼があったので、両親は急いで写真を撮り、兄に送ったのですが、間に合わず戻ってきてしまいました。日本から外地へ行くのは長兄の部隊が最後のようでした。そして終戦を迎えた後、部隊はシベリアへ移送されました。後で同じ部隊で復員した人から聞いた話では、長兄は旧制中学時代に乾性の肋膜炎（胸膜炎）を経験していました。それが再発したそうです。当初は現地に残れと上官から言われたそうですが、1人で残るのは不安だし一緒に行くと言って、着いたところがシベリアだったようです。その方は長兄のなくなる2日前まで一緒にいたとのこと、自分が移動してから亡くなったことを知ったとのことです。勿論持ち物は何一つ残ってはいないようでした。周囲の人間（前日までに一緒にいた仲間）がハイエナのように皆持ち去ったようです。

昭和23年になって、国から遺骨と言って白布で包んだ

ボール箱が届きました。中には伍長の襟章が一つ入っているだけでした。兄は何のために入隊したのでしょうか。いくら人が足りないからといって、あまり丈夫でないものも駆り出し、なぜ無残な死に方をしなければならなかったのか。

その後、両親は三六五日休まず、身体をすり減らしながら働きました。食料を始め燃料等の買い出しに遠方まで行き、また自宅から1里も離れた僅かな土地を借り、農耕に出かけ一家を守ってくれました。私も当然駆り出され、出来る範囲で手伝いました。

父は私が大学在学中に癌で亡くなり、母は私の病が伝染し、休む間もなく父の看病で、毎日家事をやりながら3年も日赤病院まで出かけていきました。当然無理がたり父が亡くなってから3年ほどで亡くなりました。私が社会人になった年の9月でした。両親は58歳でした。父母は不幸のまま亡くなりとても残念でした。

七 学徒動員の思い出

吉祥寺北町

並木

嘉一

学徒勤労働員

私は昭和4年、吉祥寺北町で生まれ育ちました。現在85歳です。

地元の第一小学校を卒業して、都内の中学校に進学しました。中学校に入る前年、小学校6年生の時に太平洋戦争がはじまりました。

私が中学校2年生のころから、農村の人手不足を補うため勤労奉仕という名のもとに動員がかけられ、農繁期には東京近郊の農村に手伝いに行きました。昭和18年4月、中学校3年生になると本格的に学徒動員が始まり、私たちの学年は、立川飛行機製作所や飛行場の西側にある多摩陸軍技術研究所に勤務するよう命じられました。

私のクラスは技術研究所で、他の4クラスは立川飛行機に割り当てられました。当時は、学校単位で動員場所が決められていたのか、私の学校から中島飛行機に行つた生徒はいませんでした。

通勤は西立川まで電車で通っていましたが、電車の中は動員の学徒で常にあふれていました。研究所の跡地は、

現在、昭和記念公園に様変わりして、かつての痕跡はどこにも見当たりませんが、それでも公園を訪れると当時のことが思い出されます。

私たちは、10人のグループに編成され常に同一行動をとるように言われていたので、出勤するときは駅前に全員集合、整列後、銃を持った衛兵に「かしら右」と敬礼してから入所していました。勤務時間は朝8時から17時までで残業はありませんでした。退所するときも出勤時と同様、衛兵に敬礼してから帰りました。勤務場所が軍の研究施設だったこともあり、学徒動員といっても兵隊と同じ扱いで大変厳しいものでした。この点、軍需工場の指定を受けているとはいっても、民間会社であった中島飛行機との処遇に大きな違いがあったと思います。

研究所内で私たちに与えられていた仕事は、物運びや雑用で中学校3年生程度の小僧にやれることと云えばたかが知れています。研究所ではいったい何を研究しているのか興味はありましたが、私たちがやっていた仕事の内容は、極秘事項であったため、詳しいことは一切教えてもらえませんでしたが。仲間内では、作った機械をよく飛行機に載せて実験を繰り返していたので、電波探知機（現在のレーダー）でも作っているのではないかという話をしていました。研究所には、立川高女（現立川女子

校)の生徒もいました。

お昼ご飯は、食堂に取りに行き部屋で食べていたが、ご飯(白米)の他、魚の煮つけなどのおかずもついていました。私たちの研究所はほとんどが将校さんで組織されていたため特別な食事が用意されていたものと思えます。

また、研究所の敷地内には、高射機関砲の陣地があり、そこに配属されていたのは私たちと同じ年代の予科練の学生でした。予科練とは、飛行予科訓練生のことで、パイロットになるための訓練を受けている学生です。中にはその後特攻隊を志願した学生もいたかもしれませんが、この時は、練習する飛行機やガソリンが不足していたため、仕方なくそこに配属されていたようです。予科練も私たちと同じ軍隊組織の一部ですが、縦割り組織のため、予科練の学生たちは私たちと同じ食事は与えられず、いつもお腹を空かしていたようです。

動員中も学校へは週に一度は戻っていましたが、学校に行っても勉強はせず、鉄砲や竹やりを使った軍事教練ばかりです。友だちとの話題も最後は食べ物の話となり、工場に勤務する者たちの粗悪な食事の話をし、さすがに自分たちは白米を食べているとは言えませんでした。

余談ですが、終戦間際のある暑い夏の日、敷地内にあ

った防火水槽で友人と一緒に泳いでいたところを大佐の肩章をつけた将校に見つかり「貴様ら軍法会議(*1)にかけてやる！」とこっぴどく叱られました。その時は学徒にも軍法会議がかけられるのかと半信半疑でした。しばらくの間は、本当に呼び出しがくるのか不安な日々を過ごしましたが、終戦を迎えてほっとしました。

勤務先で受けた機銃掃射

上空には、米軍の戦闘機が乱舞していました。大きな輪を描いて旋回していると思うと両翼から火を放ちながら急降下してくるのです。そして地上すれすれまで下りてきてキューンと金属音を残して急上昇していきます。迎撃する日本の飛行機もないので自由奔放に飛び回っていました。米軍の攻撃目標は、もちろん立川飛行場とその関連施設でしたが、飛行場に隣接している私たちの研究所も例外ではありません。繰り返し行われた激しい攻撃もひと段落したのか、一時静かになることがあります。周囲を見回すといたるところで土煙が上がっており、遠くの方では機関銃の音も聞こえるのですが、頭上には米軍の飛行機は一機も見当たりません。攻撃も小休止かと思いい、防空壕の上に腰を下ろした時、突然轟音とともに真っ黒い大きな塊のようなものが屋根すれすれに飛び

去ったのです。あわてて身を伏せ見上げると10数機ものグラマン戦闘機が横一列に並んで機銃掃射をしながら飛び去るところでした。どこを目がけて攻撃したか分かりませんが、部屋に戻ると天井には大きな穴がいくつもあいていました。床には多数の葉きようが散乱しており、これに当たらなくてよかったなと仲間と話していました。

武蔵野の空襲

中島飛行機武蔵製作所が初めて空襲を受けたのは、昭和19年11月24日のお昼頃だったので、私はその様子を知りませんが、空襲で大きな被害が出たことはあとで聞きました。私が印象に残っているのは4月2日に行われた夜間爆撃で、この時は北町の自宅からもよく見ることができました。

その日の夜半、空襲警報のけたたましいサイレンの音が目覚め、慌てて外に出ました。頭上を見ると敵機が南の方角から侵入してくるところでした。最初に上空に達したB29の編隊が爆弾と一緒に多数の照明弾を投下したのです。照明弾は目を射るような光を放ちながら落ちていききました。落ちるといっても、落下傘のついた照明弾は、空中を浮遊しているように長時間上空にとどまっ

ているのです。あたりは昼間のような明るさで、これでは灯火管制（*2）も全く無駄だと思いました。この照明弾によって、夜間でありながら中島の工場は白日の下にさらされたのです。超低空で次々に飛来するB29の編隊は、工場の真上にくると遠慮会釈もなしに投弾していき、漆黒の空に白く浮かび上がったB29の胴体から投下される爆弾は、まるで雨が降るようにさえ見ええました。幸い私の家は爆撃コースからそれていたので被害を受けませんでした。猛烈な爆撃のもとにさらされている人々のことを思えば何とか無事でいてほしいと祈らずにはいられませんでした。

爆撃は、その後しばらく続きましたが、私はこの時、投下された爆弾の数に比べ、著しく炸裂音が少ないなど不思議に思っていました。おそらくアメリカでも人手不足で製造が間に合わないため、粗製乱造で不発弾が多いのだろうと家族で話しながら床につきました。しばらくすると、ドカン、ドカンという爆発音と振動で目を覚ました。なんと、この時落とされた爆弾は時限爆弾で、不発弾ではなかったのです。おかげで私は朝まで眠れませんでした。

私のいとこが西久保に住んでいましたが、中島飛行機への爆撃で亡くなりました。中島が作った防空壕の方が

丈夫で安全だからということ、彼一人が家族と離れそこに入りましたが、その防空壕を爆弾が直撃し、いとこは亡くなりました。

当時、成蹊大学には、航空司令部のようなものが入っており、建物の屋上に機関銃が設置されていました。これは高射砲ではなく、低空で飛ぶグラマンを狙い打つために設置された機関銃でした。その機関銃が水平射撃をするので火の見櫓に上っていた人が、目の前を弾が飛んできて怖かったと言っていました。

3月10日の東京大空襲のときは、自宅からも真っ赤に染まった東京の空が良く見えました。まるで朱を流した夕焼け空のような情景は、遠く離れた場所から見ても、相当手酷い被害を受けていることが分かりました。

翌日の夕方、我が家を髪がちりじりでボロボロの着物をまとった夫婦が訪ねてきました。最初はどこの浮浪者かと思いましたが、よく見ると都内に住んでいた親戚のおじさん夫婦でした。空襲で焼け出され命からがら逃げてきたようですが、あの空襲の中よく生きていたと思いました。

おじさんの語る惨状は、私たちの想像をはるかに超えるもので、焼夷弾の洗礼と猛火に追われ死者累々の中、必死になって逃げてきたと身を震わせながら話していま

した。

B 29 の墜落

4月7日頃だと記憶していますが、高射砲からの攻撃を受けたB 29が墜落しました。ぐるぐると旋回しながら落ちていくB 29の姿をみて、はじめは自分の方に落ちてくるように見えたためどちらに逃げようか迷っていると、吉祥寺駅方面にそれて墜落しました。今のヨドバシカメラあたりに落ちたように見えたので、急いで自転車で乗り現場を見に行きましたが、どこにも見当たりませんでした。さらに東へ進み久我山付近まで来たとき、やっと墜落した機体を見つけました。初めは煙で良く見えませんでした。そのうちジュラルミンの白い機体が見え、尾翼が見えてきました。目の前に見えるB 29はとにかく大きく、家を潰し地面に突き刺さった機体は、ビルの6階くらいの高さに見えました。

立川の研究所にいた時、空中戦も目撃しました。B 29は立川の砂川付近に墜落し、日本機は国分寺あたりに墜落したように見えましたが、落下傘が開いて日本兵が下りてきたのが見えました。



1. 爆弾が初めて使用された4月7日の空襲

終戦と戦後の食糧難

8月15日の終戦時は、研究所で玉音放送を聞きました。内容はよく分かりませんが、戦争が終わったことを知り、これで自分は助かったと思いました。しかし、中には、「飛行機に乗って相手に突っ込んでやる！」と騒ぐ気性の荒い兵隊がいたため、飛行場に残っていた飛行機のプロペラは全部外されていました。

その後、東京にはアメリカの第7騎兵師団が進駐してきました。騎兵師団と言っても、まさか馬に乗ってはいないなと思っていたら、皆さっそうとした姿でジープに乗ってきました。この姿を見て私たちは、「これじゃ勝てるわけがない」と思いました。女は山に逃げろとかい

うデマも流れましたが、アメリカ兵は紳士的で暴力をふるうことはありませんでした。

終戦と同時に学校に戻りましたが、しばらくの間、勉強は手につきませんでした。勉強する気にもなれず、正規の先生もいなかったため、陸軍士官学校に行っていた先輩が代用教員として教えていました。まるで年の近い兄貴みたいな存在でしたが、先生の数は全く足りなかったようです。また、学校には予科練崩れのような学生がいて、海軍の帽子をかぶって威張り散らしていました。

研究所に勤めていたころ、給料は特にもらっていませんでした。学生なのでもらえるとも思っていないでしたが、戦争が終わってしばらくすると、30円ばかりの勤労員手当がいただけるという知らせがあり、郵便局までもらいに行けということでしたが、私は行きませんでした。

食糧に関しては、戦後の方が苦労しました。戦争中は配給制度がありました。戦後はめっちゃくちゃです。畑は強制買収でなくなったため、庭先にあるわずかな畑で家族が食べるものを作るのが精いっぱいでした。

昭和25年頃、趣味の登山に行った帰りのことです。中央線の茅野駅のホームにたくさんの方がいて、電車の窓からお米を放り込んでいました。闇米の買い出しですが、

列車が途中の甲府駅に着いた頃すべて経済警察（*3）に没収されてしまい、甲府駅のホームにお米が山積みになっていました。私も登山用のリュックサックの中にお米を隠し持っていました。警察に「登山帰りです。」と説明し没収されずに済みました。

私は、昭和24年に武蔵野市役所に入庁しましたが、当時は職員の中にも復員された方がたくさんいて、沖縄戦での悲惨な体験談を聞いたこともありました。

立川の飛行場で、「剣」（つるぎ）という飛行機を見たことがあります。初めこの飛行機を見たとき、おとりの飛行機かと思間違えるほど粗悪なものでした。エンジンはちゃんとありましたが、機体には薄い鉄板のようなものがはられ、操縦桿はつるはしの柄が使用されており、飛ぶと車輪が落ちるようになっていて、特攻用に作られたものと後で知りました。

アメリカ軍は事前の偵察で、工場の配置や高射砲の場所などを正確に把握していたそうです。アメリカとの技術、情報力の差を痛感しました。これで日本は勝てるわけがありません。それでも戦争を押し通した当時の日本の軍部はいったい何を考えていたのでしょうか。



当時を振り返る並木さん

*** 1 軍法会議（ぐんぽうかいぎ）**

主に軍人に対して司法権を行使する軍隊内の機関で、一般的には軍の刑事裁判所として知られている。

*** 2 灯火管制（とうかかんせい）**

米軍機の夜間空襲時、地上の明かりが標的にならないように、電灯やローソクの使用が制限されていた。また、電灯の笠などに黒い袋をかぶせていた。

*** 3 経済警察（けいざいけいさつ）**

戦時中、経済統制違反を取り締まるために設けられた警察組織

八 武蔵製作所での空襲体験

茨城県つくば市

矢作やはぎ

勝美かつみ

「軍国少年」の誕生

私は昭和3年、山形県のほぼ真ん中を流れ酒田港に至る最上川沿いの農家の五男として生まれた。

昭和9年4月、福原村尋常小学校名木沢分教場に入學した。ここは、県下有数の豪雪地帯で、4月でも校庭には1m近い残雪があることも珍しくなかった。羽織袴を着て入学式に行ったが、翌日からはモンペに変わった。

一年生は石盤と石筆、消すときに使う厚手の布切れが当時の筆記道具だった。それを教科書と一緒に風呂敷に包み、背中に背負って学校に行くのが風習となっていた。

「サイタ サイタ サクラガサイタ」

「ススメ ススメ ヘイタイススメ」

これが初めて覚えた文字だが、教科書の下段には鉄砲を担いだオモチヤの兵隊が行進している挿絵があった。私の「軍国少年」はここから創られていったようだ。

学校では、新年の祝賀（四方拝）に始まり、紀元節、天長節、明治節、春季皇霊祭、秋季皇霊祭などの祝祭日があった。その日は、羽織袴をつけて参列し、祝祭日に

ちなんだ唱歌を唄い、堅パン2個（新年はみかん）をもらって帰るのが嬉しかった。しかし、校長先生の「朕惟フニ我カ皇祖皇宗」に始まる教育勅語の奉読になると、私たちは「気を付け」の姿勢でしばらく頭を下げていなければならなかった。ほとんど意味が分からない言葉だったので、辛抱できなくなり、隣の友達を突いたりイタズラしていた。五年生ごろになると、尋常小学校修身書（巻頭は教育勅語）の大部分は暗誦できるようになった。その頃になると日本軍による中国への侵攻が始まり、戦時色が日増しに強くなっていった。

村の人に召集令状が来ると、小学生は村の人たちと一緒にになって出征兵士を駅まで見送りに行った。日の丸の旗をみんなで振りながら、「勝ってくるぞと勇ましく、誓って国を出たからは手柄立てずに死なれよか」という軍歌を歌い「バンザイ、バンザイ」といいながら見送った。駅前は見送る人たちでいっぱいだった。

私のすぐ上の兄も出征して、家には両親と私の3人だけになっていた。私は、尋常小学校を卒業すると村から4キロほど離れた高等小学校へ進学した。学校の帰りなど中学校や農学校へ入った先輩たちと行き交うことがあったが、私は羨ましく思っても気後れして話しかけることはできなかった。

昭和16年12月8日、日本軍がハワイの真珠湾を奇襲爆撃し、米英に対し宣戦布告したことが、学校の放送で繰り返し流されていた。

学校の名称も国民学校に変わり、私は卒業後の進路のことを考え始めるころとなった。学校からは、農家の長男は別として、次男三男は、少年兵や満蒙開拓義勇軍、産業戦士に行くように、半ば強制的な口調で説明があったように記憶している。その後、軍需工場の社員が学校に来て、会社の説明会を行っていたが、就職希望者に簡単な質問をして、入社可否を決めていた。

私は、働かなければいけないという使命感もあり、たまたま中島飛行機の担当者と学校で出会ったため、中島飛行機武蔵製作所に就職することを決心した。

中島飛行機武蔵製作所への就職

昭和17年4月、私たち県下の「産業戦士」たちは、山形市にある豆が崎公園の招魂碑のもとに集められ、臨時列車に乗って京浜地帯の軍需工場へ向かうこととなった。

奥羽本線の山形駅を夕刻に出発して、上野駅に着いたのが翌朝の5時頃であった。駅には中島飛行機の係員が迎えに来ていた。その後、中央線に乗り換え三鷹駅で下車したが、駅前には畑や野っぱらが広がっているだけで、

工場らしきものはどこにも見当たらなかった。

私たちが住む寄宿舎は、北多摩郡保谷（現西東京市）にあつて、木造2階建ての建物がいくつも並んでいた。部屋の中には、通路をはさんで両側に2段ベッドがあつた。

寄宿舎での生活は、軍隊の内務班を模したもので大変厳しく、5〜6人を一班にして、小隊、中隊、大隊に組織され、団体行動が基本となっていた。

班長の起床の合図で5時45分に起こされ、点呼が済むと外の広場へ出て天突き体操を行う。寮の消灯時間は、午後8時半頃だったように思う。休日は、月2回あつたが、外出や外泊をする場合は許可が必要であつた。

毎朝午前7時過ぎに隊列を組んで、中島飛行機の青年学校へ向かい、朝食はその食堂で食べていた。

青年学校で最初に説明を受けたのは、職番と徽章（バッジ）そして水洗トイレのことだった。職番は氏名と同様の意味があり、職番の入ったバッジを付けていないと構内に入りることができなかった。また、職階によって色分けがされていた。水洗トイレ専用の紙以外は絶対に使用しないように言われていたが、それでも水が詰まってあふれることがあつた。ついには、トイレの前に用紙支給の当番まで立っていた。



中島飛行機附属武蔵野病院の外観

青年学校はコンクリート造りの2階建てで、かぎ型に建っていた。学校では、工場での専門職（職工）につくことを前提にした講義と実技の授業が中心で、基本的な工作道具（工具及びノギス、マイクロメーターなどの計器）の知識や使い方、工作機（旋盤、ボール盤など）に対する基礎的訓練が主だった。設備は充分であった。

教練は、隊列の行進などが主で、鉄砲を担いだことはなかった。寄宿舎から多摩川までの約10キロの道のりを隊列を組みながら夜間行軍したこともあった。この時は、眠気を吹っ切るため、軍歌を歌いながら行進したが、着いたときは皆疲れ果て、押し黙っていた。

私は、いつからともなく微熱が出始め、疲れを感じるようになった。会社の診療所へ行くように言われ、診察を受けたところ、肺門リン巴線腫脹の診断とともに3か月休養の診断書をお願いした。結核の一手手前であった。

私はその後、田舎に帰り、両親に事情を説明したが、まずは医者を探さなければならなかった。一駅先にある大石田駅の近くに医者があることが分かり、そこで薬を調剤してもらいしばらく通院することとなった。

帰郷して実感したことは、村には大人の男がほとんどいなかったことだ。そのほとんどは、出征や予科練、満蒙開拓義勇軍、軍需工場への徴用などで不在だった。このため、村は静かだった。

この病気は、栄養価の高い食べ物をとる必要があると分かったが、食糧はすでに配給制となっていたため、我慢するほかなかった。しばらく療養を続け、会社へは1か月おきに診断書を送っていたが、ある日一通のハガキが飛び込んできた。

「相尋度事之有候條 五月□日迄出頭相成度候

昭和十八年五月□日 武蔵野憲兵派遣所」

毛筆で書かれた憲兵隊からの呼び出し状であった。ドキッとしたが、とにかく出頭することとなった。五日市街道を下り、現在の吉祥寺本町郵便局の隣に、当時交番風の二階建ての建物があつた。そこでは簡単な聴取で終わったが、内容としては、明日から職場について働けるということであった。隣の部屋からは竹刀を叩いて、怒鳴っている声が聞こえてきた。

工場での仕事

会社の労務課へ行くと、寄宿舎や職場はすでに決められており、私の配属先は、のこぎり型屋根の第九工場であった。その手前が本館で、本館前は芝生の広場になっていた。第九工場の奥には、コンクリート造りの4階建ての建物があった。エンジンの組み立てや試運転を行う工場といわれていた。

私の職場は、研磨工場で「油止め外環」（ビール缶を厚手にして7センチほどに輪切りにした形で大小あつた）の研磨を担当していた。先に旋盤で形作られ、焼き入れたものが回ってきた。研磨機に取り付けられた円盤の砥石の回転に合わせて、回転軸に装着した「油止め外環」が研磨された。その際、研磨の促進と熱の除去を兼ねるため、水や薬剤の入ったもの、また精度の高いものは、油性のものが注入された。仕上がりは、1ミリの十分の一前後で測定はマイクロメーターで行い、内側はノギスが用いられた。

職場は、10人前後の職工を一組にまとめ、統括責任者（伍長）が置かれていた。勤務時間は、朝と夜の8時に引継ぎ、交代を行い、12時間勤務（2交代制）となっていた。一週間ごとに夜勤と昼勤が代わっていた。

私が抵抗なく研磨機の仕事に付けることができたのは、

青年学校で前準備ができていたことと、組の先輩が親切であったからである。

工場は、地下道が四方に伸びていて、本館の下あたりに診療所や食堂、売店などがあった。

B 29の爆撃があるまでは、ひもじい思いをすることはなかった。夏の盛りだったと思うが、夕暮れ時、本館前の広場に氷を乗せたビヤ樽が山と積まれていた。従業員には大ジョッキも配られたが、私はビールが飲めなかったので先輩に回して大変喜ばれたことを覚えている。

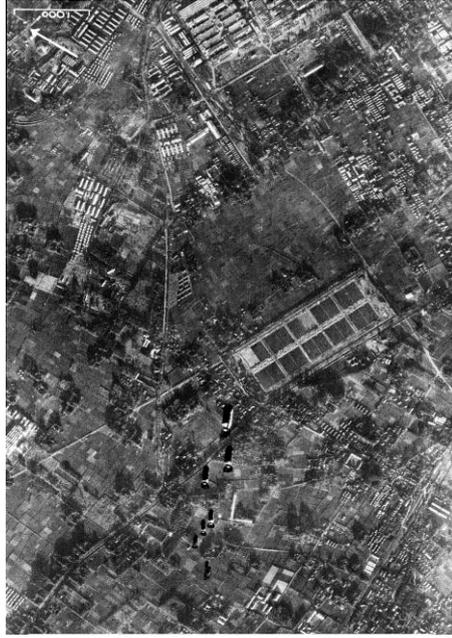
私は、青年学校の時以来、新聞やラジオに接する機会がほとんどなかった。自宅にこれらのものがなかったこともあるが、職場の人たちは、自宅やアパートなどから通勤していたので、世間のことや戦局のことはある程度知っていたと思う。しかし、職場でそうした話題が出た耳にしたことはなかった。

ある朝、工場長が朝礼の中で、「東工場の中で警察に日記が押収された。動揺することなく生産に励んでほしい。」という話があった。この時も特に時局に触れるような話はなかった。

休みの日に、ある先輩に声をかけられ、暑さしのぎに高尾山へ登山に行ったことがある。山頂の木陰で休んでいるとき、先輩から「サイパンが墜ちたら、いずれ（空

襲がくるな。」と言われたが、私は返答することもできず黙って聞いていた。その後、昭和19年7月7日にサイパンが陥落したが、先輩の言ったことが現実のものになった。

昭和19年11月1日、サイパンを飛び立ったB29爆撃機が中島飛行機武蔵製作所を上空から初偵察した。そして、あの「11月24日」を迎えたのである。



昭和19年11月24日
B29から投下される爆弾。写真上に武蔵製作所、中央に境浄水場がみえる。（工藤洋三氏提供）

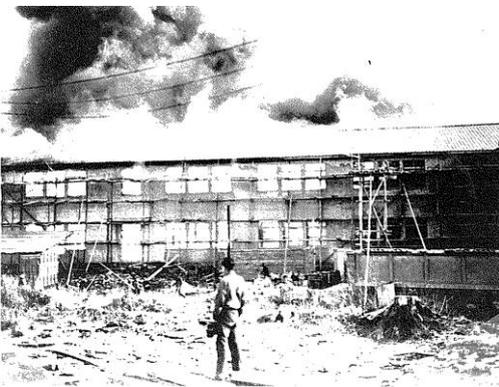
11月24日

この日、私たちの職場（組）は夜勤だったため、幸いにも全員が無事だった。夜、会社へ行き、地下道を降りると壁際に黒くなった死体がいくつも並べられていた。工場の屋根は破れ、壊れた鉄柱がむき出しになり、その

隙間から青い月が顔をのぞかせていた。

この後も、何度か爆撃があったが、私自身の日時や行動の記憶がはつきりしないので、覚えていることに限り列挙していく。

まちの隣組などでは、防空演習や消火訓練が実施されていたが、中島飛行機では、そのような事前の訓練は一切なかった。空爆があったときの避難体制や火災が発生した時の消火活動など、どうしたらよいのか、誰も分らなかった。空襲警報が鳴ると、門を目がけて皆、走り出していく。誰かと一緒にの時もあったが、ほとんどが一人だった。その先どこへ逃げるのか、何も決まっていな。電動モーターの音とサイレンの音を聞き間違えて、逃げ出したこともあった。



空襲で燃える武蔵製作所（日時不明）

空襲が激しくなると、朝食の時に昼食用のおにぎり2つをもらうようになっていた。逃げた先は、東伏見方向や関前方面、武蔵野女子学院方向が多かった。畑や原野を目指して逃げていたのである。

成蹊学園には、当時高射砲陣地があつたが、私がこの近くにいた時、艦載機が後ろからダダダッと機銃掃射を浴びせてきた。危機は一瞬に去つたが、恐怖の思いはしばらく消えなかつた。

この頃から、工場の疎開が始まり、私たちは新たに十数人の組で、八王子市の大和田町にあつた機織工場跡に機材を運び疎開した。この時の宿舎は八王子の遊郭跡だった。

帰郷そして終戦

八王子市街地は、昭和20年8月1日の空襲で廃墟となり、その後、私は郷里に帰り終戦を迎えた。

中島飛行機からの賃金はその大部分が貯蓄に回され、毎月支給される額はごくわずかだったが、昭和20年以降は月に100円もの給料をもらっていた。実家に帰った時に積立明細と賃金を受領し、これでやっと戦争が終わつたと感じた。

昭和21年に学校へ通うため、改めて上京した。この時

は市内の西窪（西久保）に下宿しながら、都立上野中学校まで通学し、私の新しい学校生活と青春が始まつた。

第二部 市民の心に残る戦争体験

九 語り伝える太平洋戦争

吉祥寺北町

平戸 ひらと

孝子 たかこ

昭和16年12月8日 太平洋戦争開戦

日本は、米国ハワイにあった軍艦を攻撃し戦争が始まりました。あの日のことは、今も鮮明に脳裏に焼き付いています。

私は、山口県岩国市にある麻里布（まりふ）国民小学校2年生のころ、夕餉（ゆうげ）の支度に忙しい母が、白いエプロンの裾で手を拭きながら、「これで沢山お菓子を買ってきなさい。」と渡された大金にびっくりしながらも、一目散にお店に行きました。しかし、お店の中は、ガランとして空のガラスケースだけが残っているだけでした。がっかりしながら家に帰り、着いたときはすっかり力も抜けていました。当時、甘いものといえば、サツマイモぐらいで、それもやがて配給となり主食となりました。時々、鈴を鳴らしながら自転車でアイスキャンディー売りのおじさんが来るのが楽しみでした。やがて、街も張りつめた空気が増し、激戦も近づいてくる様子が、ひしひしと情報として伝わってきました。

昭和20年8月6日 広島原爆投下

当時、私は岩国にある県立女学校の2年生でした。通学のため、麻里布駅（今の岩国駅）から西岩国駅まで通っていました。突然「ピカー」と目に入った一瞬、空一面が真っ白になり、思わず目を覆い、立ちすくみました。続いて、北東の方角で「ドーン」と強烈な大音響とともに、空いっぱいキノコ雲が舞い上がったのです。私は恐怖に慄（おのの）きながら呆然と立ちすくんでいました。駅の柱時計に目をやると時計の針は8時15分を指していました。急いで学校に向かいましたが、教室の様子はいつもと違い静まり返っていました。その時、学内放送が流れ「只今、日本が実験をしました。」と告げられました。教室の皆はホッと胸をなでおろしていました。その後、「直ちに校庭に並んでください。」と放送があり、校庭に整列した後、女学生1年生から4年生までが先生方の誘導で山の奥に入っていました。お腹もすきましたが、その日は山の中に潜んで長い日に耐えていました。その後、疲労困ぱいの中、帰宅しましたが、麻里布駅に下車した時です。長いホームは真っ黒い顔、顔、顔……。やと聞こえてくる「水、水、水」という弱弱しい声。母親にむしゃぶりついている哀れな赤子の姿もありました。

この方たちは広島で被爆した後、線路伝いに50キロも命からがら逃げてきた人たちでした。

その夜は、後ろ髪をひかれる思いで家に帰ったものの、黒い顔の人たちが枕元に浮かび、なかなか寝付けませんでした。

昭和20年8月14日 岩国大爆撃

本土にも火の手が上がり、いよいよ緊迫した状況の中、女学校は夏休みに入りましたが、出された宿題は松根油（しようこんゆ）の採取でした。松の木にV字型のキズをつけて竹の筒に樹液を採ります。これは、飛行機の燃料に混ぜるためでした。採取する量によって、理科の点数が高くなったり、低くなったりしました。

岩国爆撃の前日、私は、麻里布駅より一つ先の藤生駅の近くに住む伯母の家に行き、翌日に友達の高林さんと松根油採取に出かける約束をしていました。翌日の8月14日の早朝、麻里布駅のサイレンがけたたましく鳴り、藤生辺りも、警戒警報が鳴り響きました。私たちは、庭の防空壕を出たり入ったりして、落ちつかない時間を過ごしました。その日の夕方6時頃のことです。従兄弟の悟美さんが麻里布駅から藤生駅近くにある自宅まで泥まみれで帰ってきました。

従兄弟は息を詰まらせながら、言葉を発するのがやっとという感じでしたが、いきなり、「おばあさんが亡くなった」と言って、「急いで家に帰ろう」と私に言いました。

そして、私と従兄弟は何も持たずに、二人して走り続け、やっとの思いで岩国市役所辺りに着くと、以前はのどかで美しかった周囲の景色は、道なき道と沼地のようになり果てていました。従兄弟は私の手を握りしめ、二人してやっとの思いで家に辿り着きました。我が家は形こそ残っていましたが、庭先はあちこち穴だらけで大きな爆撃の痕跡が残っていました。私が立ちすくんでみると、家の中から祖母が現れました。私は思わず抱き合いながら安堵感に浸りました。

暫くすると、祖母は、奥の間に行くようにと、私を優しく労わるように背を押すのです。私が家の中に入っていくと、床の間に身を横たえていたのは母でした。頭から頬にかけて弾丸が貫き、血の気のない顔を見て、私は立ちすくんでいました。畳の上にはアスファルト色のドローとした、血が流れていました。

「お母さん、お母さん」と、嗚咽をこらえつつ母の頬に顔をすり寄せても私の声は母には届きません。

真夏の蒸しかえる暑さの中、冷たい母の体を抱きなが

ら、私はどん底の悲しみを味わい、姉と兄の3人で地獄の様な夜を過ごしました。私はそのとき母と共に一緒に死のうと思いましたが、今こうして生き永らえながら、この時のことを思い起こすと、その時の心の傷痕が生々しく甦るのです。

私の家は麻里布駅から近く、憲兵隊の官舎もありましたが、無差別に落とされた爆弾で憲兵は全員亡くなりました。爆風圧で電信柱に立ったままの姿で、貼りついてある男性の死体……ほつれ髪がへばりつき、目玉が飛び出ている女性……すべて目を覆いたくなるほどの死体をたくさん目撃しました。また、家の裏を流れる小川には駅から逃れた人々が、うつ伏せ状態で大勢亡くなっていました。まさに地獄さながらの状況に私はすでに判断力を失っていました。戦後しばらくの間、我が家の田んぼからも人骨が出たりしました。

昭和20年8月15日 敗戦の日

その日、日本の敗戦を伝える玉音放送があるというところで、耳をそばたてていたが、雑音がひどく、よく聞きとれませんでした。「日本は無条件降伏をした」と、まわりの人が話していたが、皆の顔には虚脱感にじみ出ていました。国民の多くは、皆やせ細り長引く戦いで疲

れ果てていましたが、心の中では、空襲のサイレンにあわてふためく事もなくなり、肩の荷が下りたようでした。しかし、平和になるといつても、私達が以前住んでいた故郷が元どおりになるのか、水や食事にありつけるのか、しばらくは不安な日を過ごしました。

そんな中、男子生徒が泥沼の中をやっとの思いでおむすびを運んできてくれた時は、もう天にも昇る思いでした。しかし、そのおむすびはすでに腐っており臭いも強く、糸を引く有様でした。しかし、飢えていた私たちは、何のためらいもなくそれを食べました。今でもあの日焼けした坊主頭の男子生徒の顔が脳裏に浮かび、忘れられない思い出の一つです。

私の一番上の姉とその子供の健夫ちゃん（3歳くらい）が戸板に乗せられて死体置き場の市役所に運ばれたときです。私は姉の身元確認をするため、次兄と慌しく駆けつけましたが、筵（むしろ）をめくり、姉妹お揃いで作っていたズボンを見たとき、思わず次兄と顔を見合わせました。

姉の胸にしっかりと抱きしめられた健夫ちゃんは、窒息状態で亡くなっていました。今にも起き上がってきそうな、無キズの顔を見て胸が締め付けられそうでした。亡姉と健夫ちゃんは、大勢の死体と共に田んぼの中で山積

みにされ松根油をかけて火葬されました。何日も何日も黒い煙が漂い、後に残った山積みの死体は白骨と化していました。私と次兄は、誰のものともわからないまま無作為に骨を拾っては、桐箱に納め、遠い道のりを二人で岩国の錦帯橋の近くにあるお寺に、お骨を預けに行きました。

家に戻ると、亡母を納める棺箱が知人の計らいで届いていました。戦時中でも常に小ざれいにして凜としていた母に、せめて精一杯の旅立ちの仕度にと薄いグレーの絹の着物に薄紫の博多帯を整えました。

火葬は順番待ちでしたので、一時、麻里布小学校講堂にお棺を安置していましたが、爆撃から八日が過ぎた8月22日にやっと母の火葬の順番になりました。今日でもう母の姿も見納めと思いい、最後のお別れにお棺の蓋を開けた時、真夏の蒸しかえるような日々を経た母の体は蓋一杯に膨らみ、異臭が漂っていました。

やがて出棺となり、お棺を荷車に乗せ、遙か山向こうの火葬場に着いた時は、皆汗だくで疲れ果てていました。一人一人がマッチで火葬の火をつけて、重い鉄のとびらが、ガシヤツと冷たい音を立てて閉じられ、長い時間ののち、白骨となった母は桐箱に納められて家に戻り、亡父のいる佛壇に置かれました。

その時です。高知に入隊していた長兄が、ボロボロの身なりで帰ってきたのです。一瞬「誰だろうか？」と思いい、兵隊に行っていた兄と分かるのに、しばらく時間がかかりました。長兄は道中、兵隊と分かると、アメリカ兵に何をされるか分からないので変装して帰ってきたそうです。長兄として大事に育てられた兄は、すでに亡骸となった母と対面して、どんな思いだったでしょう。

最近、88才になった長兄に電話をかけて、そのときのことを聞いたことがあります。兄の答えはなく、察するに余りあることだったのだろうと、あらためて強く思いました。

あれから70年が経ちました。

黄泉路へ向かった時の母と時折夢枕で会うことがあります。追いつめるうちに、虚しく夢から目覚めます。

我が家は戦争中も「今日と言う日は今日しかないのだ」と、茶道、華道、舞踊、琴、書道の稽古に忙しく、子供ながらにも、ちよつと非国民的ではないかと思う事もありましたが、そんなことをさせてくれた母の恩に頭が下がります。もう一度、願いが叶うものなら、その頃の笑い声のたえない和やかな食卓の輪の中に入りたいと未だに思うことがあります。

国家総動員して御国の為にと働いてきましたが、勝ち負けではなく、今思えば「井の中の蛙、大海を知らず」で、大国アメリカと戦争に立ち向かうことすら無鉄砲なことだったのではないかと思います。

戦争ほど悲惨きわまりないものはありません。今が平和であるゆえに、当時被曝された方々は、現在どの様な人生を辿っておられるのか、時は遠く流れても尚更に迫って参ります。

北朝鮮のミサイル発射成功のニュースを聞きながら頭をかしげるのです。あんなことを二度と繰り返してはならないと願いつつ、此の記を書き綴ります。

十 開戦 大興安嶺山中の戦い

関前

猪俣 いのまた

三郎 さぶろう

開戦（8月9日）

五又溝に移動後も大隊からの将校、下士官兵の新編部隊への要員差し出しが矢つぎ早に命じられ、将校は中隊長のみ、小隊長には准尉や先任下士官を充当せざるを得ず、かつ装備の半分近くが本土決戦のためと称して半減させられた。特に重機関銃は、12銃から6銃に擲弾筒（*1）も半数に減らされる始末であった。特に痛かったのは、開戦直前、大隊の虎の子である92式歩兵砲（大隊砲）2門が重迫撃砲に換装され、弾薬の補給がないまま開戦を迎えてしまったことである。7月初旬、7名の見習士官が配属されたのが唯一、心強いことであった。大東亜戦争はすでに4年目に入り、今や本土決戦も覚悟しなければならぬ状況下で、かつ五又溝周辺の永久陣地は、ほとんどその機能を喪失しており、ソ連軍の侵攻を阻止するため、師団は野戦陣地の構築を急がねばならなかった。

私は、わが大隊の三里岳周辺における野戦陣地の構築に先立ち、陣内交通路の開設が基本となるとの考えから、

まず道路構築に着手して7月中に完成していた。その後、各中隊が計画に従い陣地構築に着手し、8月8日の大詔奉戴日（*2）を迎えた。当日、大隊は休養日であったため、全員が車座で酒を酌み交わし、明日からの敢闘を期することとした。

翌8月9日、朝食の箸をとろうとしたその時、北方から低空で飛来する大飛行編隊の爆音で幕舎を飛び出した。空には星のマークがついた数十機のソ連機がいたが、一路南方に向かって飛び去った。同時に連隊本部からの電話で、「日ソ開戦」の知らせとともに、「大隊長は命令受領のため連隊本部へ出頭せよ。」との命令に接した。

私は、副官に大隊の主力を裏山の林間に疎開するように命じ、直ちに騎馬伝令の山田兵長を伴い連隊本部に急行した。途中上空には、ソ連機数機が時々飛来したが、我々にも五又溝の市街地も無視して南方に飛び去って行った。息せき切って連隊本部に駆け付けたが、まだ師団命令が届いていなかったため、連隊命令は出せないとのことであった。私はいったん大隊本部に行き、残留隊指揮者の成田軍曹と夏井軍曹に弾薬糧秣（*3）の受領準備と隊外派遣者との連絡、書類の整理処分などについて指示をだし、連隊本部に戻った。師団命令が届いたのは、もう午後11時も間近に迫っていた。師団命令が遅れたの

は、師団長と溝井参謀がともに陣地偵察のため出張中だったことがその理由であった。今にして思えば、師団は開戦当初からつまづいていたような気がして何となく不安を覚えたことが思い出される。

私は再び大隊本部に戻り、残務整理の促進を指示して三里岳への帰途についた。途中、五又溝市街を通り過ぎたころから、上空に敵飛行機が低空で飛来し、私たちを狙って銃撃を始めた。私と山田兵長は、すぐに下馬して土手の陰に伏せて息を殺していた。ダダダ…と地上掃射の土煙が自分たちに向かって襲いかかってくるときほど気持ちの悪いものはない。もうこれで終わりかと観念したが、この時は本当に生きた心地がしなかった。私が洗礼を受けた最初の攻撃であった。十数分後、敵機は、機首を北方に向けて飛び去って行った。ふと後ろを振り向くと五又溝の市街地は爆撃を受けたらしく、濛々と黒煙がたちのぼっていた。急いで大隊本部に戻ると、先ほどの銃撃で医務室として使用していた天幕に数発の被弾痕があったが、幸い患者の被害はなく胸をなでおろした。

その夜、三里岳裏の大隊疎開地に各中隊長等を集め、「大隊は、翌早朝までに前方東海山に展開して、107 Tと交代して陣地を占領し、敵の攻撃を破砕する。」との命令を伝えた。またその後、70名ほどの未教育補充兵（朝

鮮人の現地補充兵）が到着した。大隊では、彼らに与える銃がなかったため、円匙（*4）を与え各中隊に配置した。

翌日未明に濃霧の中、展開を開始し、その日一日中は東海山において各中隊の陣地配備、重火器の設置、軽機や擲弾筒の射撃範囲などを念入りに指導して、各中隊の陣地を回った。この日は朝から快晴で所々に白雲が浮き、時々北方のアルシャン方面よりわずかに砲声が聞こえるのみであった。当正面の敵情はいたって平穩である。

翌早朝から陣地の構築に精を出していると、10時頃、連隊本部から「中隊長以上は、13時に河南山の連隊本部に集合せよ。」との命令が伝えられた。

新京への転進命令（8月11日夜）

連隊命令の要旨は、次のようなものであった。

「師団は速やかに現陣地を撤収し、新京に集結して関東総軍の総予備となること、また、師団は白城子に進出後、京白線に沿う地区を新京に向かい前進する。師団は、8月10日の午前、第3大隊を列車輸送により、興安に同日夕刻、第2大隊を同じく、ソロンに派遣して師団の前進路を確保させ、主力は本夕、現陣地を撤収し白阿線に沿う地区を白城子に向かい前進する。」

わが大隊は、師団の左縦隊となり前進すべき命令を受けたため、私は各中隊長に、日没とともに準備行動を開始して、21時までに三里岳下の路上に前進隊形での集合を命じた。それまでに、弾薬の受領と糧秣の分配が慌ただしく行われた。この時初めて永久陣地の地下糧秣倉庫が開けられたが、そこには目を見張るような莫大な量の白米や砂糖、甘味料などがありとても驚いた。しかし、わが大隊が携行できたのは幾ばくの量でもなかった。出発準備は、意外と時間を要し、大隊が五又溝に到着したのは深夜1時近くで、路上は各隊が入り混じって混雑していた。私は街の中央にある橋の上に立ち、部隊の通過を整理していたが、この時、師団参謀長が駆けつけ、「猪俣大隊は師団左縦隊の第2梯隊となり前進せよ。」との命令を受けた。

大隊が、わが連隊の五又溝兵舎前に到着したのは、午前4時近くで東の空が白々明け始めていた。私は休憩を命じた後、大隊本部に行き、成田軍曹より、弾薬、糧秣の積載完了の報告を受け、患者の措置を藤田軍医に命じると共に、本部の諸書類の処分をするよう指示した。また、その後の行軍には各中隊長の乗馬を許可した。

12日の午前8時頃、大隊は緑水付近において、第2梯隊長の指揮の下、尖兵（*5）中隊となり行軍を続行し

た。その頃、現地人の避難民が陸続とつながり部隊と入り乱れる状況となった。日が昇り始めると暑さは一層厳しくなり、道路も乾き、濛々と砂塵が舞い上がる状況であった。10時頃、梯隊長から部隊を停止して、避難民のため道路を開放し、その後部隊は夜間行軍するよう示達された。私は主力部隊を路外の日陰に入れ大休止を命じた。開戦以来の夜間行軍の連続で各兵士の表情には疲労が見え始めていた。

白城子への前進（8月13日）

13日の午前3時過ぎ、尖兵中隊長から「敵戦車らしきものが前進路上に出没」との報告に接し、私は対戦車警戒を厳にして行進続行を命じた。その時、師団の前進偵察の任にあたっていた、師団搜索連隊長が後方に引き返すのに遭遇した。同隊長によると、戦車をとまなう敵が進路上に出没し、このままでは師団前進は困難との報告をするため引き返すところだという。なお、第一梯隊の師団自動車隊はそれ以前に通過しており、連絡が取れないとのこと。後方を振り返ると、北方の五又溝方面の空はポーと赤く染まっていた。

行進続行中、東天が白み始めたころ、小河川を通過中の大隊砲小隊の車両が湿地帯にはまり難渋しているとの

報告があった。後方から自動車で急迫していた師団長から「猪俣大隊は、今後第178i長の指揮に入って行進せよ」との命令を受けた。私はあまりの唐突な命令に対し、腑に落ちないまま行進を続行していると、第2梯隊復帰の命令が伝えられた。この変更命令は、戦後になって気づいたことだが、師団長は、この時すでに西口の戦闘態勢を考えていたのかもしれないと思った。事実、西口の戦闘では我が第1大隊を右第1線、178iを左第1線として展開させたのであり、178i長の統一指揮下で戦闘を指導する構想があったのかもしれないと推測される。当時私はそこまで気づかず納得ができなかった。ただし、それならば西口の戦闘後、178iはなぜ師団主力と別行動を取らねばならなかったのか不可解である。

陽が昇り始めるころ、我が大隊は緑水と西口間に差し掛かっていた。折しも敵飛行機2機が飛来するのを発見し、直ちに大隊を疎開隊形での前進を命じた。幸い我が隊には損害はなく、敵は1〜2回ほど低空旋回しただけで飛び去った。

大隊は16時ころ、峠の高地にたどり着き、急いで峠南側の凹地に主力を終結させ、小休止させていると、大隊長は命令受領のため、師団戦闘指揮所に出頭せよとの命令があり、私は急いで戦闘指揮所に出向いた。

西口の戦闘（8月13日〜14日）

師団長が突然私の名を呼び、「猪俣大隊は本薄暮を利用して西口南側高地の敵を駆逐し、敵陣地を占領して師団主力の前進路を確保せよ。」との命令が下された。師団長は饒別に羊かんを一本くれた。私は急いで大隊本部に戻り、各中隊長等を集め薄暮攻撃に関する命令を伝えた。同時に第2中隊より阿部見習士官を長とする将校斥候を派遣して、トモゴン入口付近の敵情の搜索と橋梁の爆破を命ずるとともに、第1、第3中隊から下士官を長とする路上斥候各一組の差し出しを命じた。大隊段列は現在地に残置し、急きよ私は各中隊長と指揮班の数人を伴い先行することとした。薄暮攻撃は準備の周到こそが成功のカギを握るといわれている。薄暮までの時間が極めて少なく私は慌てていた。

薄暮を迎え、道路に並行する線路上を避難民らしき者が時々走って行った。私は道路上を進むのは危険と判断し路外の前進を命じた。ところが、路外の地形は意外と複雑でとても難渋し時間を取られ、20時になっても敵前に到達できなかった。私はこのとき薄暮攻撃を断念し、夜襲を決意していた。前進中、朝鮮人を中心とした現地徴収兵に浮足立った動揺が見受けられたため、私はいったん部隊を停止し体制を整えた。この時まるで日露戦争

の時のように軍人勅諭の5箇条を奉唱させ、隊員の気持ち
を落ち着かせたのち前進を開始した。

23時頃には、敵前6700mのところまで進出することがで
きたが、敵の第一線が不明である。伊藤第一中隊長の意
見を取り入れ、擲弾筒の発射により敵の前線の反応を偵
知することとした。この時、敵が照明弾を打ち上げたた
め一斉に射撃を開始した。この時はまるで両国の花火の
ように地上が明るくなった。曳光弾や迫撃砲弾が頭上を
飛び交う様子は、実に壯観と形容するのが相応しい光景
であった。ところが、この時第一線中隊にいた朝鮮人兵
がバラバラと後退してくるではないか。叱咤するも制止
することができなかったが、それらに構わず私は攻撃前
進を命じた。

敵陣への突入は、午前1時過ぎになった。右第一線の
第3中隊はやや右から迂回し、左第一線の第一中隊は正
面から、第2中隊は第一線中隊の中央後方を、大隊本部
は第1中隊の右後方を、機関銃中隊はさらにその後方を
攻撃前進させた。私はこの時、右手に軍刀、左手に拳銃
を握りしめて本部指揮班とともに前進した。第1線の突
入とともに敵の銃砲撃はさらに激しくなり、人影も入り
乱れて乱戦の様相を呈してきた。

この時、私の左前方を突進していた小林医見士が「ア

ッ」と叫び倒れ、右後方を前進していた常盤副官も倒れ
た。私は無我夢中で突進し、敵兵らしき影を軍刀で突き
刺していた。その後、敵が後退を開始したので陣地の確
保を急いだが、岩石だらけの山肌のため壕を掘ることが
できず、わずかの岩陰に頭を隠す程度であった。これ
は陣地の確保が容易でないと判断し、一刻も早く師団に
状況報告をする必要があると考え、藤田軍医に兵1名を
つけて、「大隊の現状を速やかに師団に報告せよ。事後
貴官は司令部とともに行動せよ。」と命じ後方に帰した。
銃砲撃音がやや収まった明け方近く、消炎が鼻をつき、
敵の遺棄した鉄帽や機関銃が散らばっており、敵は後退
したものと思われ、夜襲がとりあえず成功したと一息つ
くことができた。さて、この要地を確保するにはどうし
たらよいか。この場所は、台状の南端に突き出た岩山
で掩体の構築は、ほとんど不可能に近い。大きな岩陰を
見つけて頭を隠すほか術はなく、私は迷っていた。間も
なく東天が白み始め前方の谷間から霧の這い上がるのが
見え始めた。明るくなる頃、右第1線中隊からの報告で、
敵は我が右側に迂回し始めた模様とのことで、私はこの
ままでは敵に包囲される危険があると判断し、主力を後
方約400mにいったん後退するよう命じた。

再突撃敢行（8月14日）

後退した部隊の再編成をしてみると、中隊長等幹部の犠牲が多く中隊編成が成り立たなかったため、混成中隊を左右2ヶ群に分け、大隊長が自ら指揮をとることとした。霧が地表を這い上がるとともに敵兵が再び姿を現してきた。このままでは陣地の確保が困難と判断し、再び敵を撃退するほかないと決した。展開した部隊中央に機関銃中隊を配置して、2個小隊を主力の攻撃前進に伴い、援護射撃をするように処置し、攻撃前進を部隊に命じた。我が隊の機関銃の威力はすさまじく、敵を一時怯ませることができ、その間に第一線はじりじりと前進開始した。敵前約780mくらいのところで私は突撃を命じた。自らも軍刀を抜いて駆け出そうとしたその時、左大腿部を鉄棒で「ガン！」と殴られたような痛みが走り、そのまま前のめりに倒れ立ち上がることができなかった。後ろを振り返ると多々良見習士官が私のすぐ後ろにいたため、「大隊の指揮は多々良がとれ！全面的敵陣地を奪取せよ！この軍刀を持って突入せよ！」と叫んだ。彼は「ハ！」と一言言い残し敵陣めがけて突入していった。しばらくすると中畑衛生兵が私のところに来て、大腿部の止血の処置をしてくれた。小野寺上等兵の肩を借りて前線部隊へと向かったところ我が部隊は、すでに敵を

撃退しつつあった。この時、第1中隊の佐藤ヒゲ軍曹が軽機関銃で敗退する敵を撃ちまくっていた姿が今でも脳裏に焼き付いている。敵を追い払った後は直ちに陣地確保が必要であり、私は真つ先に重機関銃の配置を決め、次に各部隊の配置を指示して応急の陣地確保の配備態勢を整えたその時、敵の砲兵が突然我が部隊に向けて一斉に射撃を開始した。ヒュルヒュルという砲声の音とともに我が後方に敵弾がさく裂した。次の瞬間、目の前が暗闇となり百雷一時に落ちたかと思われる閃光と土煙、「大隊長殿！」という叫び声の後方からわずかに聞こえた。私はこの時訳が分からずただぼんやりと夢の中にいるような感じであった。おそらく大量に出血したせいであろう、意識がもうろうとしこれが最後かと思い、腰から拳銃を抜き安全装置を解いて地面に置いた。どのくらい時間がたったのか、フツと気づくと佐々木伍長が「大隊長！大隊長！」と叫びながら、4人の兵隊が私を担架に乗せて出発しようとしていた。「オイ！誰の命令で後退するのか！」と思わず叱責した時、三戸曹長が息せき切って駆け付け「師団命令で猪俣大隊は撤収せよとのことです。」と私に告げた。その後、広いはらっぱの収容地にたどり着いたが、そこには多数の死傷者が横たわっていた。

この体験談は、故猪俣三郎氏の著書「わが大東亜戦争史」から、ご遺族の方の承諾を得て、その一部を抜粋したものです。

猪俣氏は、このあと体の傷も完全に癒えないまま部隊復帰をされ、再び指揮を執ることとなりました。行軍途中で現地の人から終戦を知らされましたが、その後も行軍、戦闘は続けられ、その結果、部隊では相当数の死傷者がでました。

昭和20年8月29日、飛行機から終戦を伝えるピラがまかれ、軍の参謀から終戦に伴う戦闘の停止と今後はソ連軍指揮官の指示に従う旨の命令がありました。

その後、約2年間もの過酷なシベリア抑留生活を経て、昭和22年10月、無事日本への帰国を果たしました。



猪俣第一大隊長

著者 猪俣三郎

大正9年8月・福島県会津若松市生まれ

昭和15年9月陸軍士官学校第54期卒・見習士官を経て、同年10月陸軍少尉任官・歩兵第3連隊に赴任・(満州北安)

昭和16年4月陸軍通信学校派遣・昭和16年10月陸軍中尉・

その後アルシャン駐屯隊を経て、昭和18年11月歩兵第90連隊・19年3月陸軍大尉・昭和19年6月・関東総軍編成改編が行はれ 第107師団歩兵第177連隊第1大隊長着任

昭和20年8月9日ソ開戦・西口・号什台・など戦闘を経て8月29日・命により停戦

昭和20年10月シベリア抑留・昭和22年10月25日舞鶴上陸復員・

防衛庁に勤務・昭和44年陸上自衛隊通信団高級幕僚(1等陸佐) 昭和47年定年退職・ 現在武蔵野市在住

*1 擲弾筒(てきだんとう)

当時の日本陸軍が使用していた迫撃砲

*2 大詔奉戴日(たいししょうほうたいび)

太平洋戦争完遂のための大政翼賛の一環として一九四二年一月から終戦まで実施された国民運動。太平洋戦争開戦の日(一九四一年十二月八日)に「宣戦の詔勅」が公布されたことにちなんで、毎月八日に設定された。

*3 糧秣(りょうまつ)

軍用語で、兵員用の食料(糧)及び軍馬用のまぐさ(秣)を指す。

*4 円匙(えんぴ)

日本陸軍では土木工用の大きなシャベルを「大円匙(だいえんぴ)」、携行用を「小円匙(しょうえんぴ)」と呼び分けていた。戦場でのシャベルは、塹壕を掘る他、白兵戦の際の打突武器として使用されていた。

*5 尖兵(せんぺい)

一軍隊の行動中、本隊の前方にあつて警戒・偵察の任にあたる小部隊

十一 敗戦後の授業忘れられない

西久保

しまの
島野

のぶこ
信子

太平洋戦争が始まったのは、国民学校六年生の時だった。教師に言われるままに、地域ごとに班がつくられ、戦地の兵隊さんに思いをさせ、オーバーも手袋もせずに早朝の暗い中、必勝を願って神社にお参りした。女学校に入ってから英語禁止、最小限度の勉強や職業軍人の指導で教練が行われた。

二年生になって、宮城の外回りの草むしり、防空壕掘りなど勉強そっちのけの生活だった。三年生になると、学徒動員として立川飛行場で働くこととなった。空襲も激しくなり、工場では首や腕が飛んだという話を聞いた。

ある日、特攻隊が出撃するというので、私たちは仕事を中断して見送りに行った。一機だけ飛べない飛行機があった。兵隊さんは涙を流して悔しがった。私たちは自分の未熟さをわび、これからは飛べる飛行機を造ることを誓った。工場には防空壕がなく空襲警報が鳴ると、国立の雑木林を目指して避難した。その時、私は米軍の機銃掃射を受け、一メートル先を歩いていたら、死ぬところだった。

敗戦になり、二学期から授業が再開された。鬼畜米英（*1）を言っていた歴史の先生が目を輝かせて、フランス革命の話をしたあの日を、私は決して忘れることができない。

この体験談は、平成26年8月15日（金）の東京新聞「終戦記念日に思う」に掲載されたものを、ご本人の了解のもと一部修正しました。

*1 鬼畜米英（きちくべいえい）

かつて大日本帝国は太平洋戦争中、アメリカとイギリスを敵視し「鬼畜米英」などと呼び蔑視していた。鬼畜とは、もとは仏教用語で、仏教の概念である六道のうち、餓鬼と畜生の二道をあわせた「餓鬼畜生」の略語である。

十二 長崎被爆体験について

「まさに地獄の海」

西久保

藤本 ふじもと

竹次 たけじ

昭和20年8月9日天候晴れ、午前11時3分原爆投下

私は、当時国民学校の5年生（11歳）でした。家の前の空地でトンボを捕っていた時に警戒警報が鳴り、すぐあとに空襲警報が鳴りました。空にはB29の白い機体から落下傘が投下され、新型爆弾（原爆）が浦上方面に流れていくのを見ていました。

その時、青い光とものすごい爆音がして、私はその場で地面に伏せ、手で耳と目を押さえました。そーと目を開けるとまわりの家は砂煙、空には真っ黒い太陽と大きな原子雲が浮いていました。

家に飛んで帰ると、玄関の扉や格子戸のガラスが壊れ家に入ることができませんでした。私の家はグラブー邸の近くだったので、長崎駅から浦上方面が火の海になっているのが見えました。

やけどをした人やケガをした人たちがリヤカーに乗せられ、「水をくれー」といううめき声が聞こえるたびに、私は怖くて泣きました。

翌日8月10日の朝、父に連れられて兄二人を中心地獄に探しに行きました。途中にある浦上川は死人の山でその周りは灰のまち：まさに地獄でした。

男女の区別もつかないたくさんの人たちや、コンクリートの下敷きになって「水をくれー」と小さな声で助けを求める人を見て、私は怖くて泣きました。

一日中、父と二人で兄を探し歩きましたが見つからず帰宅しました。悲しい日が二日、三日、一週間がたち、もうだめだと思い、二人の骨を拾いに行こうと父と話していた8日目の夜、二人の兄が服と肉がくっついていて血だらけの状態で奇跡的に帰ってきました。家族みんな抱き合って泣きました。

私の浦上の親戚は全滅でした。子ども心にあの恐怖を一生忘れることはできません。現在、父母はこの世を去りましたが、二人の兄は東京と長崎で元気に暮らしています。

私は、原爆を受けた時の恐ろしい体験を忘れることはできません。戦争を知らない若い世代の人たちに、私の被爆体験を伝えていきたいと思えます。また、核兵器の廃絶と全面使用禁止のために、国民全体で全世界にアピールし平和と人間の幸福を願いたいと思えます。

十三 戦時中の暮らし

吉祥寺東町 今野 いまの スエ

私は大正13年、仙台市に生まれました。戦時中は地元
の洋裁学校に通っていましたが、戦争が激しくなると軍
需工場に徴用され、旋盤を使う作業をしていました。

昭和19年、22歳の時に親戚の勧めで、今の主人（故
人）と結婚するため、吉祥寺に出できました。ところが、
結婚して2日目に主人のもとに召集令状が届きました。
主人は以前に一度召集されており、満州やフィリピン、
シンガポールなど戦地を渡り歩き、帰国したばかりだっ
たのに、なぜまた召集されるのか、とても残念でした。
二度目の召集地は、埼玉県のある駐屯地で、ここでは、
飛行機の燃料に使用するため、松の木から油（松根油）
を採取するのが主な仕事のようにでした。

主人の実家は、当時八百屋を営んでいましたが、戦時
中は食糧が不足していたためすべて配給制でした。週に
一度配給を受け取るため、西久保の三谷通りまで食料を
受け取りに行っていました。また、当時はヤミ米を売り
に来ていた業者もいました。ある日、埼玉までサツマイ
モを仕入れるためオート三輪車で行きましたが、帰る途

中で警察に見つかりすべて没収されてしまいました。と
にかく当時は、食べる物がなく大変苦勞していたので、
子どもや孫には「ご飯粒一つ残さず食べるように。」と
伝えてきました。

戦況も徐々に激しくなり、吉祥寺あたりにも艦載機が
飛んでくるようになりました。機銃掃射から逃れるため
向かいの家にあった防空壕に逃げ込むことも多くなりま
した。当時、この戦争は負ける戦争と分かっていたのに、
なぜ続けてしまったのか。今でも残念でなりません。

戦後、アメリカに見つかると思われ、主人が
持っていたものはすべて処分しました。昨年主人は亡く
なりましたが、明るい性格で面倒見もよく誰からも愛さ
れていた人でした。

私の願いは、物の豊かさではなく、精神的な豊かさを
今の人たちに持ち続けてほしいと思います。それと平和
がいつまでも続いてほしいと思います。戦争は絶対やつ
てはダメです。



今野さん



ご主人の出征時の写真

十四 学童集団疎開の思い出

境

藤田 久榮
ふじた ひさえ

今年は、終戦・学童疎開70周年の記念すべき年です。当時に思いを馳せ、この原稿を書きました。

初めての空襲（昭和18年4月18日）

荒川区が初めて空襲を受ける直前、アメリカ軍の飛行機から、「日本国降伏しろ」「日本は米国に負けるのだ」と書かれたたくさんビラがまかれました。当時小学生の私は、そのビラを何枚も拾って家に帰ると母親に叱られてしまいました。

その直後、50^{*}爆弾が3つ投下され、軍需工場の旭電化が大きな被害を受けました。私の家は工場に近かったため、爆風の衝撃で家の窓ガラスがすべて割れました。

この爆撃で負傷した人が大八車に乗せられ、ムシロをかぶされた状態で家の前を通り過ぎ、近くのお寺に運ばれました。境内に行くと、亡くなった人やケガをした人がムシロの上にたくさん横たわっていました。あとで爆弾が落ちたところを見ると、大きな穴が開いており、改めて爆弾の恐ろしさを思い知らされました。

疎開（昭和19年8月17日）

私の母校、荒川区立尾久西小学校は荒川区の西側にあります。当時私は小学校5年生で、全校児童は約2,500名、東京都でも一番児童数の多い学校でした。各学年は8組あり、そのうち男女各4組に分かれており、それぞれの組には60名ほどの児童が在籍していました。

戦争も日増しに激しくなり、私の学校も集団疎開することに決まりました。疎開先は、福島県の小野新町、大越、滝根の3ヶ所で全校児童がそれぞれに分かれて行くことになり、私は小野新町に決まりました。

尾久駅から福島に向かう夜汽車に乗り、父母に見送るときは、離れ離れになる寂しさといっ帰れるか分からない不安でとても辛く心細い思いでした。

小野新町には翌朝着きました。8月の暑い日なのに歓迎の音楽が鳴る中、大勢の方が紙テープを投げて出迎えてくださり、とても嬉しかったです。

戦時下の異常な状況と10時間の長旅で心身ともに疲れていましたが、阿武隈山系の美しい山々と温かく出迎えてくださった地元の人たちを見て、子ども心に安らぎを与えてくれました。

小野新町には、468名が6つの宿にお世話になることに

なり、私が行った宿には、女子70名が6班に分かれ、各班の6年生が班長となり下級生などの面倒を見ることとなりました。

疎開先での生活

宿では、朝の起床が6時半、顔を洗った後、すぐ外に出て、100段の階段を登って宿の裏にある塩釜神社までお参りに行きました。お参りは東京（皇居）の方に向かって合掌をして、そのあと軍歌を歌い、最後にラジオ体操をして宿に戻りました。

疎開先での食事は、朝食が温かいご飯とみそ汁、それと2切れのたくわんだけで、お昼も朝とほとんど同じでした。夜は、おかずが野菜の煮つけと焼き魚が多かったです。記憶しています。おやつは毎日いただき、柿や桃、みかん、リンゴなどの果物の他、蒸しパンやサツマイモ、カボチャ、親から送ってもらった大豆の炒り豆などを食べました。お菓子はめったに食べることはできず、お店に行っても品物がなく買うことができませんでした。

私はいつもお腹を空かしていたので、よくみかんの皮まで食べていましたが、友だちの中にはひもじさから無断で他人の庭に入り込み、干し柿や干しイモなどを盗み出し、畑に入っては作物を荒らしている子もいました。

また、墓地で行われていた葬儀が終わるのを、ひそかに物陰に隠れ待ち、参列者が帰るとお供え物を仏さまより先に頂戴してしまう子もいました。その子たちはあとで先生に見つかり叱られていましたが、先生も子どもの気持ち分かるため涙を流しながら子どもを肩を抱いていました。いずれにしても町の方々には大変ご迷惑をおかけしました。

勉強は午前中、宿で自習を行い、午後は、地元の国民小学校の教室を借りて先生の授業を受けました。宿に帰ってから、夕食をいただき、そのあとは3日に一度のお風呂に班ごとに入りましたが、大勢で入るためいつもイモ洗い状態でした。泡の出ない石鹸はありましたが、シャンプーなどはありませんでした。

女の子は髪が長いので、シラミがつきやすく私もかゆくて仕方ありませんでした。また、肌着にもシラミがついていたので肌がむずむずしました。当時は、洗濯も毎日しませんでしたし、洗剤もなかったもので、シラミがつくのも当然だったかもしれません。新聞紙を広げ、目の細かいすき櫛で髪をとかすとシラミがたくさん落ちてくるので、落ちたシラミを急いで指でつぶしていました。

福島の冬はとても寒く、皮膚の弱い子は凍傷のように肌が赤く腫れとても痛そうでした。また、当時の暖房設

備といえ、炭を入れた掘りごたつで、そこに皆で足を
入れて暖をとり寒さをしのいでいました。

お風呂やこたつで使用する炭を作るため、山に登り薪
の切り出しによく行きました。雪の降る中、縄で薪を結
び雪の上を滑らせ下まで運ぶのですが、山に登ったり下
りたりを何度も繰り返す作業は、本当に辛い作業でした。
夜になると、汽車の汽笛を聞いては親が恋しくなり泣
き出す子がたくさんいました。

東京大空襲前日（昭和20年3月9日）

この日、6年生は卒業のため東京に帰りました。

翌日の3月10日、あの悲惨な東京大空襲がありました。
B29から投下された焼夷弾が、雨のように東京のまちに降
り注ぎ、一夜にして10万人の方が亡くなりました。

東京に帰った6年生の中にも犠牲になった子がいたか
もしれません。私の家族は、母と弟は山形に疎開してお
り、また父は一人で東京にいましたが幸い皆無事でした。

この頃になると、小野新町にもB29がやってくるよう
になり、私たちも防空壕に避難することが多くなりました。
空からの高射撃がまるで私たちのいる防空壕めがけて撃
たれているようでとても怖く、みんなで固まりながら泣
いていました。宿にも爆弾が落ち、大きな味噌蔵と私た

ちが寝ていた大広間がめっちゃめちゃに壊れたため、被害
の少なかった他の部屋に移ることになりました。

当時、福島郡山や山形は、空襲で大きな被害があつ
たようです。私たちもあの時、防空壕に入らず宿にいた
ら多くの犠牲者が出ていたかもしれません。今でも運が
良かったと思います。

終戦（昭和20年8月15日）

この日の朝、先生から、正午に大事な放送があるから
玄関の広間に集まるように言われました。私たちは、皆
正座してラジオから聞こえる天皇陛下の声を聴いていま
したが、話の内容は子どもたちの私たちには、よく分かりま
せんでした。先生や宿の人たちは涙を流しながら聞いて
いましたが、あとで、先生から日本が戦争に負け降伏し
たことを聞きました。

その年の10月、ほとんどの友達は東京に帰りましたが、
私は空襲で家が焼けたため帰ることができず、何人かの
友達とそのまま福島に残りました。

東京に帰ることができたのは、昭和21年3月でした。
私は友だちの中でも一番長い1年半以上もの間、福島で
疎開生活を送ることとなりましたが、無事、東京に帰り、
家族に会えた時は本当にうれしかったです。

「あぶくま友の会」の活動

昭和61年9月、当時、一緒に学童疎開をした同級生約150名が尾久西小学校に集い初めての同窓会を行いました。皆、数十年ぶりの再会で、それぞれ、お世話になった宿ごとに分かれて、当時の苦労話に話が弾み時間を忘れてしまうほどでした。

その後、同窓会有志で「あぶくま友の会」を発足させ、毎年同窓会を実施するようになりました。また、平成19年以降、尾久西小学校を同会で訪問し、6年生の子どもたちに、私たちの戦争体験を伝える活動を行っています。私たちが疎開中に食べた福島特産の栗カボチャを給食の調理師さんをお願いして作っていただき、子どもたちと一緒に食べながら当時の話をするのが本当に楽しいひと時です。また、私たちの会では、二度と悲惨な戦争を繰り返さないという願いを込め、小学校の正門前に「平和」の石碑を設置しました。

私たちの会は、小学校での活動の他、疎開した福島県の小野新町とも定期的に交流を進めています。メンバーの数も年々少なくなり、いつまで活動を続けられるかわかりませんが、子どもたちに戦争の悲惨さや平和の大切さをいつまでも語り続けていきたいと思います。



疎開先で撮影した記念写真（丸囲みが藤田さん、左が6年生、右が5年生の時）

学童疎開や空襲 大先輩が体験談

荒川・尾久西小

戦時中の出来事を知ってもらおうと、学童疎開を体験した荒川区の尾久西あぶくま友の会の会員が9日、母校の区立尾久西小学校（会藤澤一校長）を訪れ、6年生の児童たちと交流した。

同小は戦時中、空襲が激しく、3、6年生の619人が福島県小野町などに疎開した。同窓生たちは1988年、疎開先の地名にちなんで

会を結成し、92年には母校に平和のモニュメントを建立している。

訪問したのは伊藤妻会長ら7人、70人の児童たちはグループに分かれて話を聞いた。青木里奈さん（10）は「防空壕に逃げたので、隣の人に焼夷弾が直撃して大けがした話は驚いた。戦争でたれも幸せにはならない。戦争のない世界がほしい」と語った。と感想を話した。友の会の会員と児童たちは、小野町産野菜を料理した「カボチャのそばろあんかけ」などの給食も一緒に食べた。

疎開体験者の話に熱心に耳を傾ける児童たち—荒川区立尾久西小学校

十五 戦中、戦後の生活

吉祥寺東町

草部 くさかべ

ひさ

開戦

私は昭和2年生まれで、開戦時は世田谷の東北沢に住んでいた。実家はせんべいを焼いて売っていたが、鉄製のせんべいの型は戦争で供出されてしまい、商売ができなくなってしまう。近所の人たちから、配給になった大豆などは、そのままでは食べられないので、お菓子風にしてくれと頼まれた。私はそれを預かって豆屋さんへ持って行き、調理したものを近所の人たちに渡す手伝いをしていた。

昭和16年、成徳女子商業学校三年生のときに、大東亜戦争が始まった。ちようど裁縫の授業を受けているときに、天皇陛下の開戦のお言葉が放送され、教室でかしくなると聞いていた。その後は、あまり授業もせず下北沢の商店街で救護の訓練をすることが多くなった。担架や医療品を持って人がを探し治療する練習が主な内容だった。負傷者役の人に包帯を巻いて担架に乗せて連れて行き、それを先生が審査した。戦争の影響で卒業は3か月繰り上がった。

軍需会社への就職

女学校卒業後、私は自宅からも近い久我山にある岩崎通信機に入社した。勤め先は、岩崎通信機と中島飛行機、日本無線の3つの中から選ぶことになっており、私は一番新しく、自宅にも近い同社を選んだ。同じ学校から約10人が入社したが、私が卒業した学校からは第一回目の挺身隊（*1）として就職した。

岩崎通信機は大きな通信系の軍需会社で、私は管理課に配属され、事務系の仕事をしていた。東京、埼玉などに100社ほどある下請け会社に、親会社からのお知らせ等の書類を配りに行くのが主な仕事だった。私たちとは別に、2学年下の在校生も先生に連れられて会社に来ており、はちまきを巻きながら工場で働いていた。会社では、毎日朝礼を行い、会社の偉い人たちから話を聞いたりして、まるで学校にいるようだった。

私は自宅のある東北沢から井の頭線で会社まで通っていたが、空襲で車庫が全部焼かれたため、電車が動かなくなってしまう。そのため、途中の代田橋まで歩き、会社から来るトラックに乗って通っていた。トラックでは、荷台に立ったままの状態で何人も並び、ぎゅうぎゅうの中、倒れないように前の人の肩につかまっていた。

空襲

ある日、会社の放送から「敵機がやってきた」という情報が流れたが、そのとき敵機はすでに会社のすぐ近くまで来ていて、2階の事務所から急いで外の防空壕へ向かった。廊下に敷かれた新しい赤い絨毯の上を、壁沿いに這うように降りて逃げていると、飛行機は窓すれすれの低空飛行で迫っており、操縦士の顔が見えるほどだった。防空壕までは、玄関から距離があつたので、必死になつて走った。私の職場の上司は、みんなを逃がしてから最後に出ようとしたらしく、飛行機が通り過ぎても姿が見えなかった。心配になつて事務所に戻ると、部屋の真ん中で倒れ亡くなつていた。銃弾は分厚い電話帳を貫通していて、下の階にも届くほどの威力だった。私は先輩と2人で上司のお宅へ知らせに行った。また、烏山工場からは、女性社員が防空壕に逃げ遅れ亡くなつたという知らせが入った。その後、2人の社葬が行われたが、今もそのときのことを思うと胸がいっぱいになり、戦争の恐ろしさを忘れることはできない。

家の前に水の干上がってしまった小川があり、そばに小さな橋がかかっていた。近所の人たちで、そこに古い畳を3畳分くらい運んで入口をつくり、中に古い畳を敷いて防空壕を作った。年寄りや小さい子ども、働けない

人は明るいうちからそこに入り、携帯用の明かりがつく中、食糧や各自必要なものを持ち運んでいた。商店街の人たちは、防空壕を個々で持つておらず、みんなそこに入っていた。あるとき空襲警報が鳴つて家から外をのぞくと、高台にある学校がめらめらと燃えているのが見えた。周りは四方八方やられてしまったが、うちのところだけ無事だったので、逃げてきた人たちがたくさんいた。

戦後の生活

終戦の天皇陛下のお言葉は会社で聞いた。その後、会社からは「残つてここに勤めたいという人は残つてもいいけれど、米兵から何をされるか分からないので、通いではだめ。勤めたかったら地方から来た人たちが入っている寄宿舎に入ってくれ。」と言われた。私は実家が近くだったので会社には残らず、役所の出張所に勤めることとなった。そこでは、回覧板を書いたり、配給物があると住民にお知らせしたりという仕事をしていた。しばらくして岩崎通信機から連絡があり、もう軍需会社としてではなく、物産会社としてやっていくので、来てくれないかという誘いがあり、また勤めることになった。会社では、外国人を相手にするので、空き部屋を使って朝1時間くらい英語の勉強をした。戦時中は敵だった外国

人がお客になり、当初は何かされるのではないかと、怖い気持ちもあったが、朗らかな人が多かった。

戦中の将校さんが、剣だけ外した軍服そのままの格好で、会社に通勤していた。会社が軍需会社ではなくなつたため、彼らはハムなどの食品や洋服のボタン、瀬戸物など、品物の見本を持って注文を取りに行く営業をしていた。軍人の気持ちのままでは商売にならないため、三越と高島屋から課長級の人を呼んで研修を行っていた。私はそのとき、事務所電話番号をしていたが、軍人だった男性は、それまで威張っていたので、情けないと思っていたかもしれない。

戦後は食べ物がなく大変苦労した。毎朝着物を持って江の島まで行き、物々交換でしらす干しや芋を手に入れていたが、高価な着物よりも、木綿の着物の方が好まれていた。浅草から電車で芋を買いに行ったときには、電車の天井に芋が届くほど積んであったため、乗車口から電車に乗ることができず、窓から出入りしていた。

母親の実家の新潟に、お米をもらいに行つたとき、電車の中で検査が入つたことがある、ちゃんとお金を払つてもらつたお米を、みんな取られてしまった。また、家がもうすぐというところで、駅からつけてきた警官に呼び止められ、米をすべて取り上げられたこともあった。

あるとき、警官から逃げてきたと思われる女性が我家に来たので家に上げると、いきなり着物を脱ぎだした。その女性は、お米を隠して運ぶために工夫をした下着をつけており、その下着には、米が寄らないように細かく縫いめがつけてあり、靴下にも米が入っていた。

結婚した主人は、戦時中海軍にいたそうだが、人間魚雷として特攻する直前で終戦となり生き延びたと話していた。主人の手の甲には、船上で被弾したときの弾が、ずっと残っていた。

私は学校で竹槍の訓練を受け、当時は一生懸命やっていたが、あんなもので勝てるわけがない。戦争は本当に恐ろしいと思う。

*1 挺身隊(ていしんたい)

日本は戦局の悪化に伴い徴兵が拡大し、国内の男性労働力が極端に不足した。このため、第二次世界大戦中の昭和18年に「女子挺身隊」が創設され、主に14歳以上25歳以下の女性が軍需工場などに就職した。



当時を語る草部さん

高校の卒業アルバムより（草部さん提供）



裁縫授業の様子。この時、天皇陛下の開戦の言葉が放送された。



級友との記念写真（右端が草部さん）

十六 戦時中の暮らし

吉祥寺北町

稲垣 いながき

美智子 みちこ

父の出征

私は昭和7年（現在82歳）、北海道小樽市で生まれました。父は開業医で、シナ事変の時に軍医として2年ほど戦地に行きましたが、父が出征している間、母が子ども4人と姑の面倒を見るので生活がとても大変だったようです。

当時、出征軍人のいる家は銃後を守る（*1）家族として、写真入りで新聞に紹介されましたが、私たち家族も新聞に掲載されました。あとで母が私に話してくれましたが、家族が出征するときは、大変名誉なことなのだから奥さんは泣いてはいけなと言われたそうです。

戦時中の暮らし

戦争が始まると服装は、スカートからモンペをはくように言われました。私の小学校時代はまるで軍隊のように厳しく、校長先生が廊下を通るとみんなで並び敬礼をしていました。また、登下校時は、学校の門にあるご真影（天皇陛下）にも最敬礼していました。

北海道の冬はとても寒く、暖房もきかない体育館で校

長先生が教育勅語を読むときは、手がかじかんでとても辛かったです。雪の降る中、校庭でやることもありました。家に帰ってから、かじかんで霜焼けになった手を母が両手で温めてくれたことを覚えています。

戦争当初は食料も含め、まだ「物」がありましたが、戦争が激しくなると徐々に少なくなり、お店にも品物がなくなってきました。靴もなかったので、下駄をはいてよく学校に行っていました。冬はさすがに長靴を履いていましたが、それ以外は下駄をはき、下駄の歯が減らないようにゴムを付けたり、鼻緒も自分で作ったりして大切に使っていました。食べる物もなくなることはありませんでしたが、お芋やカボチャが多かったです。ジャガイモをすりおろして焼いたものやカボチャのおかゆが、特に甘くておいしかったです。白米はめったに食べることはできず、誕生日などのお祝いのお祝いのときに食べることができました。この時の白いご飯は本当においしかったです。おかずがなくても白いご飯だけで食べられました。当時は、「欲しがりません勝つまでは。」と言われ、国民も日本が勝つと信じていたので、贅沢やわがままを言える雰囲気はなく、子どもながらに我慢していたと思います。私には兄が二人と弟が一人いますが、中学生の一番上の兄は軍需工場で働き、年子の2番目の兄は、国からの

命令で援農といって強制的に農家で働かされていました。2番目の兄は、よほどきつく辛い作業だったのか、一時帰宅してまた農家に帰る日、もう戻りたくないと言ってストーブの前で泣いていましたが、母親が、お国のためだからと何とかなだめて送り出していました。

日本がアメリカを攻撃したとか、日本の兵隊が敵兵をやっつけたという良い情報は北海道にも入っていましたが、東京が空襲で焼け野原になったとか原爆が落ちたということは知りませんでした。あるとき、日本の兵隊が玉砕したというニュースが入り、学校の先生をはじめみんなで泣きました。それでも神風が吹いて日本が戦争に勝つと信じていました。

近所に古本屋をやっている人がいましたが、この人は結核という嘘の診断書を出して出征逃れをしていました。戦争反対だったのか戦地に行くのが嫌だったのか分かりませんが、このような人もいました。

北海道空襲

戦争も終わりに近い昭和20年7月、北海道各地でアメリカ軍による空襲がありました。当時、軍需産業の生産地であった室蘭や釧路、根室の空襲がひどかったようですが、私の住んでいた小樽も空襲被害にあい、この時は

自宅の防空壕に逃げ込みました。小樽の港近くには高射砲陣地もありました。

その後、ソ連（現ロシア）も参戦したため、北海道に侵入してくるのではという不安がありました。室蘭で大きな被害が出た艦砲射撃もソ連によるものだったと噂され、北海道はソ連に取られてしまうと思っていました。

戦後の暮らし

終戦後、学校で使っていた教科書で軍事教育を連想させるような表現や挿絵などはすべて黒く塗りつぶしなさいと言われました。英語の先生もいなかったため、地理の先生が英語を教えていました。ひどい発音でしたが、先生の方も大変だったと思います。

食べることに関しては、戦後の方が苦劳しました。母と私は食料と交換する着物を持って買い出しによく出かけましたが、せっかく買い出しに行っても帰りにおまわりさんに見つかり没収されることもありました。苦劳して手に入れた食料を没収するなんてひどいと思いました。あの没収した食べ物はどうなったのでしょうか？ちゃんと国が責任を持って、国民に食料を配給してくれれば、こんな苦劳をすることもなかったと思います。

高校まで地元の小樽で過ごし、大学進学のため上京し、

その後、武蔵野市に住んでいた主人と結婚しました。主人は、戦時中、海軍の経理学校に入学したそうですが、学校では先輩たちによく殴られていたと話していました。戦時中、友人のご主人は、軍需工場で働いていたとき、自分が作ったもので多くの兵隊さんを死なせてしまい申し訳ないという思いから、戦後、靖国神社や知覧飛行場に行つて亡くなつた方の冥福を祈っています。

子どもたちに伝えたいこと

私が子どもの時は、戦争中だったこともあり、生活も勉強も国から言われた通りのことをするしかありませんでした。そのせいか、私自身、自分の意見を発表したり目立つことはあまり好きではありませんでした。しかし、戦後東京に出てくるようになって、自分の意見や考えをきちんと相手に伝えた方が良くと思うようになりました。その方がコミュニケーションを図ることができて、より人間関係がうまくいくと思います。

私は、自宅の一部を「吉祥寺おもちや図書館」として開放しているため、子どもと接することが多い日を過ごしています。子どもたちに伝えたいことは、戦争はしてはいけないということ。戦争は許すことのできない悲しい出来事です。国も家族も成り立たなくなるほど

のすごい損失で、個人の考えも偏つたものになります。また、戦争をはじめるのはいつも男性で、戦っているのも殆どが男性です。男の子を育てる時の母親の教育がとても大切ではないかと感じています。

*1 銃後の守り（じゅうごのまもり）

軍隊などで直接戦闘に参加したり、戦闘部隊を支援する輸送部隊に参加するのではなく、それら軍隊が消費する資源、物資の供給を支えることによって、戦争の遂行と勝利を支援するという考え方。戦場の後方であるため「銃後」と表現した。



体験を語る稲垣さん



小学6年生の時のクラス写真。中段の右から4番目が稲垣さん（白い洋服の学生）

十七 疎開先での暮らし

吉祥寺東町

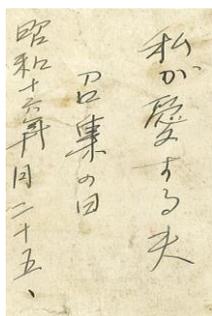
榎谷 ますや

久美子 くみこ

父の出征と疎開

私は、大阪府西淀川で生まれました。

昭和16年に父親が海軍に召集され、出征となると、私
たちを大阪へ置いていくわけにはいかないので、茨城県
の筑波にある父の実家へ、母と兄二人と共に疎開するこ
とになりました。私が3歳のときでした。



お父さんの出征時の記念写真。写真裏面には奥さんの思いと
「召集の日 昭和16年10月25日」の日付が記載されている。

大阪から茨城へ行くには、今は新幹線を乗り継ぎあつ
という間に着きますが、当時は汽車を乗り継ぎ丸一日以
上かかりました。土浦の駅前の旅館で一泊し、次の日、
村の人が実家の牛を引いて迎えに来てくれました。私た
ち親子は、手荷物とわずかばかりの家財道具と一緒に手
すりもない荷台に乗り込み、駅から三里（約12km）以上
も離れた村まで、街頭もないでこぼこの砂利道を牛車に
揺られながら、かなりの時間をかけて夕方遅くにやっと
実家にたどり着きました。

父は都会の大学を卒業し就職していましたが、長男で
あつた父には村に親が決めた許嫁らしき人がいたようで
母は入籍していませんでした。当時は、親の許可がない
と結婚できなかつたため、私の母は嫁として認めてもら
えませんでした。その頃、伯母たち（父の姉や妹）も子
連れで疎開していましたが、そのようなところへ、母と
私たち兄妹が行つたため、とても肩身の狭い思いをしま
した。私たち親子にも部屋を与えてもらいましたが、奥
の隅の方の部屋で、物置部屋のようなところでした。

食事の時、祖父たち皆は、囲炉裏の周りで食べている
のですが、私たち親子だけ一段下がった「かまど」に近
い板の間で食べていました。この状況は祖母が亡くなる
まで続きましたが、口数の少ない祖父が時折優しくして

くれるのが救いでした。

東京大空襲

昭和20年3月10日の東京大空襲のときには、田舎からも東京の空が打ち上げ花火のように明るくボワーと見え、その光景は今でも目に焼き付いています。その頃になると、田舎の方にもB29が爆撃にきました。私たちのいた場所は、霞ヶ浦航空隊から離れていたのですが、まだ被害は少なかったのですが、それでもB29は飛んできました。私たちはB29が来ると急いで防空壕に逃げ込みましたが、家の裏にあった防空壕では何の役にも立たなかった気がします。

伯母たちは、たびたびお米や野菜を持って上京し、着物やお金と交換していました。その伯母たちが子連れで上京したその日に空襲に巻き込まれ、それきり行方不明となりました。何日かして祖父が手掛かりを求めて東京まで行ったものの、伯母たちを探し出すことはできませんでした。

父の死

その頃、父は氷川丸に乗っていましたが、南方に行っていたときに、腸チフスと思われる病気にかかりました。

横須賀の海軍病院に運ばれ治療を受けていましたが、昭和20年5月8日、終戦まであとわずかですぐに亡くなりました。父は、戦死（戦病死）として扱われました。

私たち兄妹は、父が亡くなる直前、母に連れられて海軍病院まで行きましたが、当時、腸チフスは感染病ということで、病院の中に入ることが許されず、父に会えない私は泣くばかりでした。今でもその記憶が鮮明に残っており、忘れることはありません。

その後、母は父のお骨を抱いて実家に戻りました。お葬式には大勢の人たちが集まっていたのを覚えています。

戦後の苦勞

戦後の暮らしは、戦中と変わらずその苛酷さが一層身に染みしました。私たちは食べていくために百姓仕事をせざるを得ませんでした。母は都会育ちだったため相当辛かったと思います。炊事や洗濯、風呂の水入れは外つるべ井戸からくみ上げ、井戸端で作業をしていました。冬は寒い時期は特に大変でした。

母は女学校を卒業していたため、その後、学校の代用教員（事務職兼用）として勤めることになりました。その代り私たち兄妹は、朝学校に行く前にカゴを背負って山に行き、炊きつけ用の松葉さらいや杉葉集めをして

から登校しました。

物資は配給もありましたが、自分たちの着る服や下着などは手縫いで作っていました。母は、自分の着物や帯で皆のモンペや足袋を作っていました。

学校では、ノミ、シラミを駆除するために殺虫剤のD Tの白い粉を頭にかけてられることがありました。生徒が一斉に廊下に並ばされて頭から粉をかけられるのですが、むせながらも我慢していました。

兄たちは進学するため、夜も裸電球のもと勉強していましたが、祖父から「百姓の子は勉強する必要はない！」と口癖のように言われていたので、近所の駐在さんが見かねて「うちに来て勉強していいよ。」と言ってくれました。お蔭で兄たちは高校へ進学することができましたが、昼間は農作業をしなければならぬので、定時制の学校を選びました。祖父母は父が学校を出たきり家に戻らなかつたので、そのことが頭にあつたと思いません。祖父はその後亡くなりましたが、田畑は他人に任せようになり生活もだいぶ楽になってきました。私は、高校を卒業するまで筑波に住み続け、その後、東京の学校へ進学するため上京しました。

現在のつくば市はあの悲惨な戦争などがなかったかのように、目まぐるしい変貌を遂げ、すばらしい学園都市

に生まれ変わりました。

若い人たちに伝えたいこと

今も外国では、内戦の続いているところがありますが、戦争は、お互い憎悪ばかりが生まれて心まで失くしてしまえます。戦争だけは絶対にやってはいけません。若い人にはぜひ、命の大切さを知り、人を思いやる気持ちを持ってほしいと願っています。

最後に私ごとながら、8年前に96歳で亡くなった母に大感謝です。辛い時でも愚痴をこぼさず、常に前を向き、苦勞を乗り越えてきました。今ある幸せは母のおかげと思っています。

十八 遥かなり第二の故郷「興南」(北朝鮮)

吉祥寺東町

おかばやし
岡林

あきこ
曉子

今年、太平洋戦争終戦70周年、日韓基本条約50周年にあたり、国際関係でも大変重要な年になります。

人は誰でも子どもの頃を黄金時代のように想いおこしますが、私の原風景は、日本海の彼方、あの懐かしい第二の故郷「興南」です。

日本窒素の作ったまち「興南」

私は父の仕事の関係で、4歳から15歳までの11年間を「興南」で過ごしました。以前の興南は、100戸くらいが点在する寒漁村でしたが、昭和に入り日本窒素という企業がこの町に進出してくると大きく変貌しました。

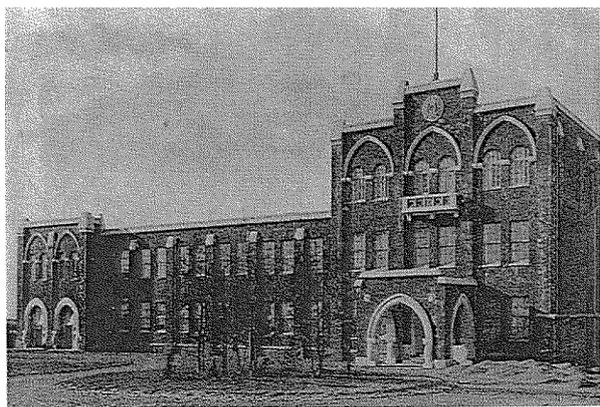
明治以降の事業家で最も傑出した人と言われた、野口遵氏が中心となり、昭和4年、この興南の地に鴨緑江水系の4発電(総出力156万6000kW)を使った画期的な一大化学コンビナートを出現させました。この発電事業が朝鮮半島の近代化に果たした役割は絶大でした。ちなみに日本では昭和37年完成の「奥只見発電所」の出力が35万kW、昭和38年完成の「黒四発電所」が23万4000kWでした。

工場の敷地は約600万坪、当時世界有数の規模と言われた水電解工場やアンモニア合成工場がありました。従業員の数は約6万人で、名もなき寒村はたちまち人口18万人の大工業都市に生まれ変わり、全朝鮮の中でも京城、釜山に次ぐ第3の都市となりました。

当時の生活の様子

当時、私たち家族は、規則正しく並んで建っていた赤レンガ建ての自宅で生活していました。電気代が安かったため、ヒーターやオーブンも使い放題で、朝から蒸気のお風呂がポンポンと沸いていました。冬はマイナス20度になる過酷な環境でも、家の中は全室スチームが入っていたため、半袖で過ごしていました。各家庭には電話もあり、当時の日本国内では考えられない生活をしていました。引き揚げ後、火吹き竹を使いながら、土間でご飯を炊いている祖母の姿を見てびっくりしました。

当時通っていた女学校の校舎は、レンガ造りで白い窓枠があり、ヨーロッパ風の大変モダンな建物でした。学校の割ぼう室にはすべてオーブンが入っていて、他に洗濯室などもあり、当時、全朝鮮一の学校と言われていました。



岡林さんが当時通っていた興南高等女学校

終戦

昭和20年8月15日、女学校3年生の時、勤労動員として火薬工場でダイナマイトを作っていたときです。目の前に広がる日本海の彼方から聞こえてくるNHKラジオの「重大放送があります」というアナウンサーの声に、私たちは皆作業の手を止め、玉音放送に耳を傾けました。

「堪え難きを堪え、しのび難きを…」

あまりよく聞き取れませんでした。これで戦争が終わったことを知りました。女学校に駐屯していた兵隊さんたちは、暑い中、校庭で銃を片手に直立不動でこの放送を聞いていました。

戦後の生活

終戦後のある日の朝、朝鮮の保安隊が来て、3時間後に社宅を明け渡せとの命令があり、私たち家族は追い出されました。戦後は食べるものがなく大変で、朝鮮銀行

から引き出したお金も命令により再入金させられました。このため売るものもなくしばらくはソ連の軍票での生活が続きました。市場の水たまりに落ちていた、ふやけたワカメを拾って食べている人もいました。栄養失調のためお腹が膨れ、顔色が黄色くなり次々と亡くなる方が大勢いました。遺体をむしろに乗せ、引きずりながら近くの三角山まで運び、長く掘った穴に葬りました。凍った土は深く掘ることはできず、そうするほかなかったのです。

昼はマンドリン（ソ連軍による発砲）のため、こうりやん畑に毎日隠れ、生きた心地がしませんでした。

その後、多くの人たちが、カムチャッカに連れていかれました。

命がけの脱出

昭和21年5月頃から国が何も助けてくれなかったため、自力での脱出が始まり、私たち家族もやみ船に乗り夜半に脱出しました。3日間船に乗り続け、着いたところは、乗船した時と同じ場所でした。結局、お金だけ騙し取られたのです。その後、無蓋車にぶら下がって乗るなど、何とか38度線（南北朝鮮の境界）まで歩きました。昼間は岩場に隠れ、夜に歩けるだけ歩き通しました。途中、

豪雨の中を歩くこともあり、ずぶ濡れになった赤ちゃんを背負いながら黙々と歩き続ける母親もいました。歩くことができず、戸板に乗せられたままその場に置き去りにされた人もたくさんいました。その人たちはその後どうなったのか、今でも忘れられません。

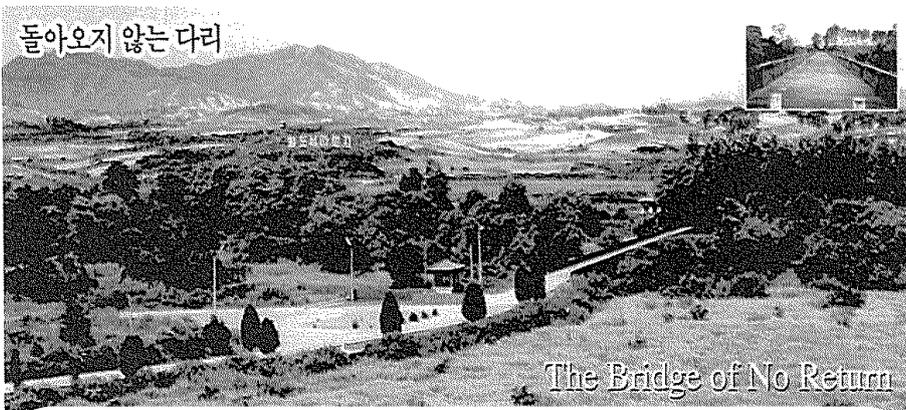
アメリカ兵とソ連兵が38度線をはさんで睨み合いを続けている中、私たちは、幅が狭く板でできた揺れる橋を渡って、何とかアメリカ側へ逃げることができました。しかし、子どもを背中に背負っていたある母親は、はるか下に流れる川に落ち、その後流され見えなくなりました。友人の母親も3人の子どものとともに流されてしまいました。

その後、注文津（チュムンジン）でアメリカ兵にお菓子を缶詰をもらうなど、助けられながらのテント生活が1ヶ月ほど続き、迎えの上陸用舟艇に乗り博多港に到着することができました。私は、帰る船の中で、DDT（消毒）の消毒のため、1週間ほど下船することができませんでした。また、途中で船の中で亡くなり水葬された方が何人もいました。

博多に到着後、原爆を受けた広島のみちを窓越しに眺め、無事、地元の高知に到着しました。

「帰らざる橋」

戦後、私は韓国の板門店を旅行で訪れました。38度線にかかる「帰らざる橋」を見て、かつて自分もこの38度線を命がけて渡った日のことを思い出し、胸が締め付けられる思いでした。私は、橋を見つめたまましばらく動くことができませんでした。



「帰らざる橋」

軍事境界線の真ん中（38度線）に「帰らざる橋」がある。1953年7月27日の休戦協定後、戦争の捕虜交換がここで行われた。この橋の名前の由来は、捕虜たちが一旦、方向のどちらかを決めると、二度と帰ることができなくなることから、名づけられた。

二 市民から寄せられた戦争資料等



中島飛行機武蔵製作所の食堂で使用されていたお盆
(浅田秀光氏 提供)



中島飛行機武蔵製作所の工員が通勤時に使用していたカバン (篠原多津子氏 提供)

表彰状

智山中学校

加藤貞夫

右者學徒勤勞報國隊員トシテ昭和十九年十一月二十九日當所ニ入所シタルガ偶々昭和十九年十二月三日ノ空爆ニ會ヒ勤務並ニ交通事情甚ダシク危険ト困難ニ暴サレタルニ關ラス敢然之ヲ克服排除シ十二月十五日ニ至ル十七日間無遅刻無缺勤克ク増産ニ献身セルハ誠ニ動員學徒ノ勳鑑タリ
仍テ茲ニ金一封ヲ受與シ之ヲ表彰ス

昭和二十年一月一日

中島飛行機株式會社武蔵製作所
所長 佐 郎



中島飛行機武蔵製作所からの表彰（加藤貞夫氏提供）

（内容） 右の者は学徒勤勞報國隊員として、昭和 19 年 11 月 19 日に当所に入所したが、昭和 19 年 12 月 3 日の空爆に会い、勤務並びに交通事情が甚だしく危険と困難を極める中、敢然とこれを克服排除し、12 月 15 日までの 17 日間、無遅刻無欠勤で献身的な働きを見せたことは動員学徒の鏡である。よってここに金一封を送り表彰する。

戦時中の授業風景（高校の卒業アルバムより 草部ひささん提供）



菊組裁縫（大日方先生）



敬組習字（瀬野先生）



桐組刺繍（小田島先生）

照明弾につけられた落下傘の紐

関前 秋山 昌文
あきやま まさかみ

我が家には、「照明弾」につけられた落下傘の紐がある。

この紐は、中島飛行機武蔵製作所が初の夜間空襲を受けた昭和20年4月2日に使われた可能性が高い。照明弾は、事前に攻撃目標を明確にするために投下され、落下傘で降下しながら数分間周囲を照射する。当時、吉祥寺北町に住んでいた住民がこの夜間空襲を目撃しており、「工場付近がまるで昼間のように明るく照らされていた。」と証言している。

この紐の材質はナイロン製と思われる、端に火をつけると溶けながら燃えるが、火を離すと自分では燃えず、固い黒い球になる。

ナイロンは、デュポン社が昭和10年に開発しており、日本からの絹の輸入に対処するため開発されたといわれている。当時は物資不足の中、落下傘に使われた布や紐も貴重なものだった。

一つの照明弾に8本の紐全部が使われていたかどうか不明だが、照明弾であればそれほど重くはないのでこれ

で足りたのかもしれない。

紐は、長いもので4m90cm、白色で直径4.5mmほど、8本の糸のうち、1本は赤色である。

紐は全部で8本ほど残っており、現在でも我が家の実用品として使用している。このうち7本は畑の畝づくりの直線を出すために70年間外で使用している。泥まみれだが劣化の様子もなく大変丈夫である。残る1本は大型コルセットの締め紐として重宝している。



照明弾に付けられた落下傘の紐

鞍山（満州）防空104戦隊での

B29迎撃空戦記録から

神戸市

塚原 孝一
つかはら こういち

（この体験記は、市内桜堤にお住いの上野喜久美さんより、祖父の戦争体験談として市にお寄せいただいたものです。）

大東亜戦争の記録本を読むと下士官の功績を強調しているのがよく目につく。アメリカで戦後製作された、テレビドラマのヒット作「コンバット」のサージャン役ビックモローにしてもその通りである。国家体制の違う大日本帝国の陸海軍では、将校団の陰に隠れて下士官は目立たなかったことも事実である。それでも単機戦闘が華やかだったノモンハンの空中戦では、将校団に負けず劣らず撃墜機数を重ねた下士官は連日のように新聞紙上を賑わしたものであった。帝国陸軍消滅後の情報公開では、負け戦だったのではないか、との批判も出たが緒戦の勢いに乗った時点では、明らかに勝利の道を進んでいたと思われる。

このノモンハン空中戦の新聞報道が刺激となり、学業半ばで乙種陸軍学校（下士官養成）東航校（*1）の門をくぐった小生は、昭和16年11月に大刀洗飛行場（*

2）で戦闘機操縦の基礎訓練を終え、大阪（柏原）13戦隊の伊丹分遣隊で97戦（*3）の実技訓練を習得し、晴れて操縦徽章（下士官用銅製）を身に着け、関特演（*4）を終了したばかりの東京城（満州）飛行70戦隊に着任した。陸軍生徒の軍服を着て3年後に伍長に任官した。その頃、双肩の階級章は小型化し、詰襟の鮮やかな航空兵科を表す紺碧の襟章は廃止され、少しずつ外形から変わってきていた。

単機戦闘機訓練の指導教官の准尉殿にみっちりとは込まれている最中に戦隊は機種改変で2式戦（*5）の習熟に力を入れ、ロッテの戦法（*6）の訓練中に帝都防衛の為、千葉県柏飛行場に転身した。ふるいにかけられた准尉殿以下4名は南満錦県・興城に新設された4錬27教部隊で特操・少飛（*7）の助教として精出しているうち、30里堡分遣隊に転属することになった。本隊は新設の牡丹江教錬部隊であり、大連の防空任務が主で2式戦であった。りんご畑に囲まれた飛行場での在任期間は僅かであったが、事故を含め5名のパイロットが殉職し重大な戦力の消耗であった。

折しも満州の軍需生産工場「鞍山鉄工所・奉天満飛」の防空任務を主とする飛行第104戦隊が鞍山に新設され、異例の陸大卒の戦隊長（ノモンハンのエース）が着任され

た。ピカピカの4式戦（*8）2機にあとは寄せ集めの2式戦や1式戦（*9）が勢ぞろいした。30里堡分遣隊のパイロットも104戦隊に着任して戦力の一端を担ったのである。隣の遼陽飛行場には双発重装備の2式重戦一個中隊と新京飛行場には高々度戦闘機が訓練していたと聞いていた。104戦隊では自発的に出来た無装備の2式戦で構成した高々度空中戦での体当たり特攻隊が存在していて、昭和19年12月21日のB29の迎撃戦に2名のパイロットが散華した。

この戦闘で撃墜したB29の搭乗員が脱出した時のパラシュートがナイロン生地で、当時の日本にないものだったので羽二重とばかり思っていた。整備隊長が私の空戦模様を聞いてその生地に攻撃描写を想像画として書いてくれた。生涯の記念に今でも額に入れて飾っているが、戦果については、大本営発表よりもアメリカのニュースの方が正確で、嘘をついてもすぐに化けの皮が剥がれる。

瀧山戦隊長の空中戦手記から

昭和19年12月21日、「B29 21機が黄河を通過した」との情報が入ったが、果たして満州に來攻するか不明であった。過早に離陸すると燃料切れになるのでしばらく待機していると「山海関通過東北進中」との情報で3機の

4式戦を率いて離陸し、他にも4式戦と2式戦が続いて離陸した。

高度3000mで左上空に白い筋雲を発見し、先端に黒点のある航跡雲で奉天に向かってしていると分かった。10時の相対方向を保って上昇接敵し、僚機に知らせると右後方に一列に散開した。高度7500mで敵と同高度になり機関砲を試射した。このとき、酸素も特に問題はなかった。僚機は既に間隔を500mに開いて自己接敵を始めている。しばらく敵進行方向の軸線上に占位して攻撃下令し、敵7機編隊軍の先頭に狙いを付ける。

前上方軸線にピタリだ。距離2000mで、敵は射撃を始めて曳光弾の条が集中して来て、一発でもガンと来れば一卷の終わりとなるので心細い。操縦桿の後ろにでも隠れなくなる。距離1000mで我慢しきれなくなって、3式光像照準器の中に捉えた敵機に向けて引鉄四門分を引くとドッドドッドと機関砲が快調なリズムで響き、恐怖心が一気に吹き飛び離脱の為に操縦桿を引くと大きな尾翼が真下を過ぎる。

こう述べると長い様だが、突進開始から離脱まで、ものの5秒ほどで1000mの距離から撃ち出しても3秒間の射撃がせいぜいで、発射弾はおそらく4門合計で30から40発だから技量（甲）でないと実戦には役に立たない。離脱

上昇中に僚機を見ると、指示した通り2、3番機も私の狙った先頭機を攻撃している。3番機の攻撃が終わった直後には敵は右に傾いて速度が減り降下を始めた。オヤツと思う間もなく機の後方に黒点が次々と続いて、真っ白い落下傘となって開花し、巨体はキリモミ状態になって大地に落ちて行った。落下傘で降下した敵先頭機の乗員は11名で、機長の大尉以下全員を捕虜にしたのはもちろんだが、彼はいわゆるアメリカの学徒荒鷲であった。

*1 東航校（とうこうこう）

「東京陸軍航空学校」の略

*2 大刀洗（たちあらい）飛行場

福岡県大刀洗町にある、「大刀洗陸軍飛行学校」

*3 97戦（きゅうななせん）

九七式戦闘機は、陸軍の戦闘機で中島飛行機が開発した。

*4 関特演（かんとくえん）

関東軍特種演習の略称で、日本軍が実施した対ソ作戦準備

*5 2式戦（にしきせん）

二式戦闘機は陸軍の重単座戦闘機で、中島飛行機が開発・製造

*6 ロツテの戦法

ロツテは、航空戦における戦闘機の基本的な戦術・編隊構成で、2機で一つの編隊を組む手法。

*7 特操・少飛（とくそう・しょうひ）

特操は、特別操縦見習士官の略で、太平洋戦争終盤の日本陸軍航空において、高等教育機関の卒業者あるいは在学生の中から志願して予備役校操縦者として登用された者。少飛は、少年航空兵の略で、陸軍と海軍の航空兵のうち、志願により採用された丁年未満の生徒。

*8 4式戦（よんしきせん）

四式戦闘機は、第二次世界大戦時の大日本帝国陸軍の戦闘機。愛称は疾風（はやて）。開発・製造は中島飛行機。

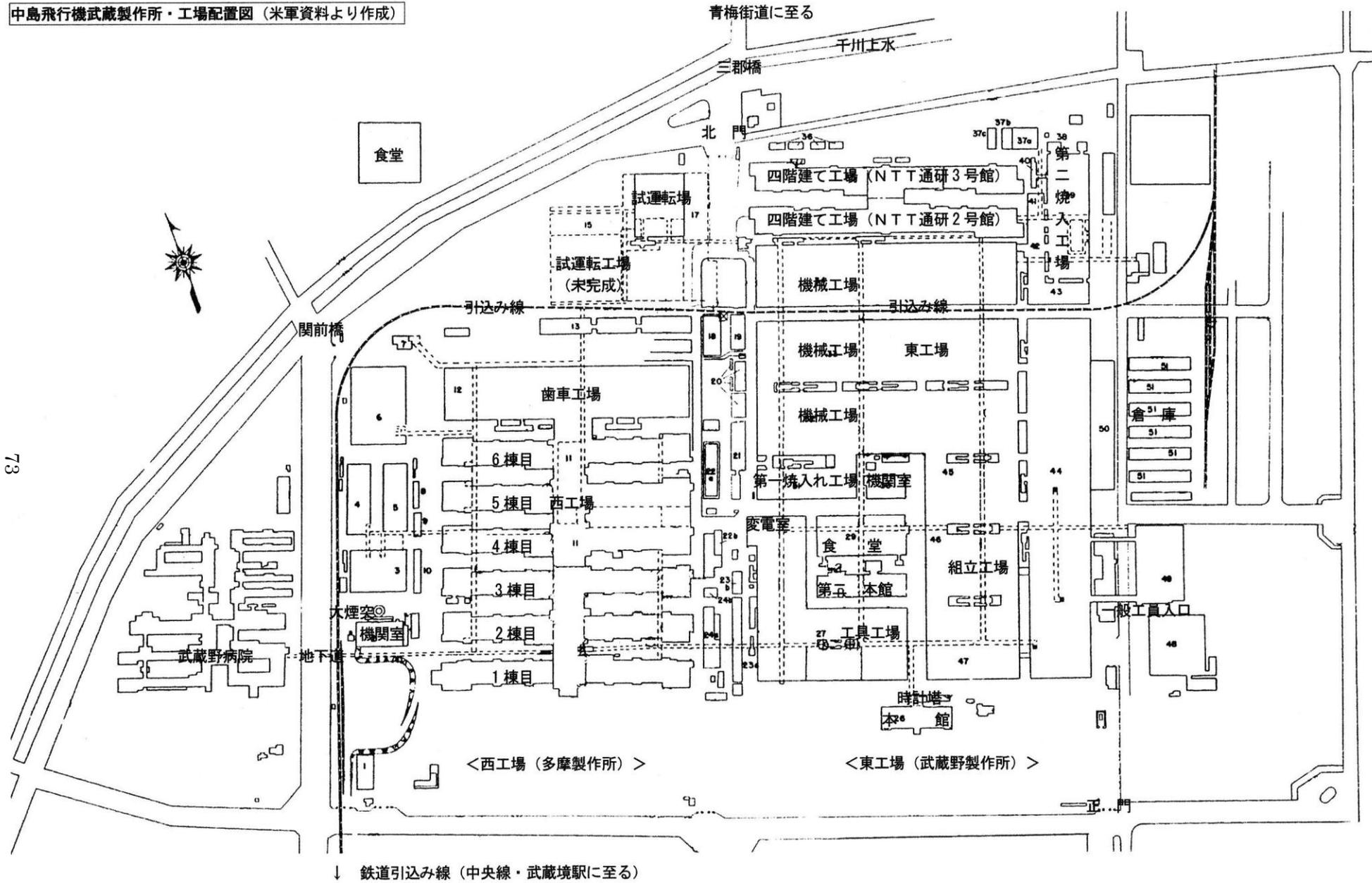
*9 1式戦（いっしきせん）

一式戦闘機は、四式戦闘機「疾風」とともに陸軍を代表する戦闘機として、太平洋戦争（大東亜戦争）における主力機として使用された。愛称は隼（はやぶさ）。開発・製造は中島飛行機。

三年表・工場配置図

戦争関連年表

西暦	元号	おもな出来事	武蔵野町の出来事
1931	昭和6	9/18 柳条湖事件から「満州事変」	前年に横河電機が転入
1932	昭和7	「満州国」建国 リットン調査団 5.15 事件 犬養首相暗殺	
1933	昭和8	2月 小林多喜二虐殺 8月 関東軍特殊演習	帝都電鉄、渋谷一井の頭公園間が開通 (翌年吉祥寺まで延長)
1934	昭和9	東北で冷害 昭和恐慌	
1935	昭和10	天皇機関説事件	
1936	昭和11	2.26 事件 11月 独防共協定	
1937	昭和12	7/7 盧溝橋事件から日中全面戦争へ	
1938	昭和13	国家総動員法、成立 (戦時体制の強化)	中島飛行機武蔵野製作所、開設
1939	昭和14	5月ノモンハン事件 国民徴用令 独ソ不可侵条約 ドイツがポーランド侵攻 (第二次大戦開始)	中島航空金属田無製造所、開設
1940	昭和15	日独伊三国軍事同盟 皇紀 2600 年式典	
1941	昭和16	12月 アジア太平洋戦争、開戦	中島飛行機多摩製作所、開設
1942	昭和17	4月 ドゥーリットル空襲 (日本初空襲) 6月 ミッドウェー海戦	
1943	昭和18	2月 ガダルカナル島撤退 山本五十六戦死 10月 学徒出陣 東京都制施行	10月 中島武蔵野と多摩が合併
1944	昭和19	4月 学徒勤労動員の通年動員が始まる マリアナ沖海戦敗北 6月 米軍サイパン島上陸 8月 学童集団疎開、始まる 11/24 マリアナ諸島から B29 初空襲	11/24 中島飛行機武蔵製作所、初空襲 その後、12/3、12/27 にも空襲
1945	昭和20	2月 硫黄島上陸 3/10 東京大空襲 4月 沖縄戦 5月 ドイツ降伏 6月 沖縄戦終結 7月 ポツダム宣言 8/6 広島 原爆投下 8/9 長崎 原爆投下、ソ連対日参戦 8/15 終戦の詔勅、GHQによる占領、 五大改革指令	中島飛行機への空襲、続く 1/9 空襲 2/17 艦載機による空襲 4/2 夜間空襲 4/7、12 1トン爆弾の空襲 8/8 1トン爆弾の空襲 米国戦略爆撃調査団、来所
1946	昭和21	天皇の人間宣言 戦後初の衆議院選挙 公職追放 11/3 日本国憲法、公布	
1947	昭和22	2/1 ゼネストの中止 トルーマンドクトリン 5/3 日本国憲法発布、教育基本法制定	11/3 市制施行 人口6万3千人
1948	昭和23	南北朝鮮分断	市営運動場、開設
1949	昭和24	中華人民共和国、建国 下山事件、三鷹事件、松川事件	
1950	昭和25	警察予備隊、発足	電気通信省「電気通研究所」開所
1951	昭和26	サンフランシスコ講和条約、締結	東京スタジアム・グリーパーク野球場
1952	昭和27	サンフランシスコ講和条約、発効 日米安全保障条約、発効	



中島飛行機武蔵製作所 工場配置図 『米国戦略爆撃調査団報告書』(国立国会図書館憲政資料室所蔵)より

四 平和に関する宣言、条例

世界連邦に関する宣言

武蔵野市は、世界の恒久平和と人類永遠の繁栄を保障する世界連邦の建設に同意し、武力国家の対立を解消して、英知と友愛に基づく世界の新しい秩序の実現を希求する。人類最初の原爆被災国として、また戦争放棄を憲法に明記した国として提唱し得る最適の立場にあることを確信し、この宣言を行ない、他の宣言都市と相携えて、世論を喚起し、これを国政に反映せしめ、速やかに国家宣言を行うとともに、進んで現行の国連憲章の改正により世界連邦の実現を期するものである。右宣言する。

昭和35年6月28日

武蔵野市議会

武蔵野市非核都市宣言

戦争の惨禍を防止し、恒久平和を実現することは、全人類が切実に念願するところである。

核兵器保有国間で核軍拡競争が激化している今日、とりわけ核戦争を回避し、原水爆の恐れのない世界を確立することは、緊急かつ重大な課題である。

武蔵野市は、平和を希求する世界連邦に関する宣言都市として、人間が人間を滅ぼす危険を防ぎ、人類永遠の平和を樹立するため、非核三原則の完全実施を願い、最大限の努力を傾注するものである。

ここに、われわれは、平和のために貢献する決意を表明するとともに、武蔵野市が非核都市となることを宣言する。

昭和57年3月29日

武蔵野市議会

武蔵野市平和の日条例

(平成 23 年 9 月 22 日条例第 23 号)

武蔵野市は、戦禍により犠牲になられた方々を悼み、戦争の悲惨さと平和の尊さを次世代に語り継いでいくとともに、市内に初空襲があった昭和 19 年 11 月 24 日を後世に伝えていくため、ここに武蔵野市平和の日を定め、市民とともに国際相互理解を推進し、恒久平和の実現を目指すことを誓う。

(平和の日)

第 1 条 武蔵野市平和の日（以下「平和の日」という。）は、11 月 24 日とする。

(平和の日事業)

第 2 条 武蔵野市は、平和の日を中心として、平和意識の高揚を図るための事業を実施する。

(委任)

第 3 条 この条例の施行に関し必要な事項は、市長が別に定める。

付 則

この条例は、公布の日から施行する。



非核都市宣言平和事業実行委員会委員 菊地 圭永子

戦後70年の節目の年に、戦争体験記録集第Ⅲ集を発行いたしました。

ご協力くださったすべてのの方々に感謝いたします。ありがとうございました。

第Ⅱ集を発行したのが、平成24年、戦後67年目の年でした。私はこの時の編集後記に、自分自身へある宿題を課しました。戦争体験のない私ですが、次の世代のためにも「平和」を伝えていきたい…。その想いで、今回も聞き取りや資料集めに携わりました。

ある体験者の方は、第Ⅰ・Ⅱ集をご覧になり、お知り合いの名前を見つけてご協力くださいました。またある方は、重苦しい時世の空気に、今伝えておかねば！とお話してくださいました。武蔵野で空襲にあわれた方、疎開先や職場で空襲にあわれた方、戦後の物不足や貧しさを乗り越えて子育てされた方。おひとりおひとりに戦中・戦後のご苦勞があり、今の社会に繋がっている力を感じました。ドラマや映画の作り物ではない生の声をこの体験集から感じていただければと思います。

聞き取りの最後に、必ず伺った質問があります。

「これだけは伝えておきたいという事はありますか？」

『戦争はもういない。』

「平和」の定義が揺らいでいる昨今、この言葉の重みと体験者の方々の思いを次世代に繋げること。私たちの宿題の終わりはまだまだ先が見えませんが、何かを感じた若者たちが動き出しています。「平和」は待っていてもやってはきません。自分たちの手で創りだしていくもの。図太くコツコツと創っていくと思います。